大分高等商業學校
9.11.28
商業調査部

朝鮮の有煙炭（朝鮮の石炭第一篇）

『附錄』朝鮮に於ける石炭鑛業の趨勢

研究資料
分類 4 N
番號 16
大分高商經濟研究所

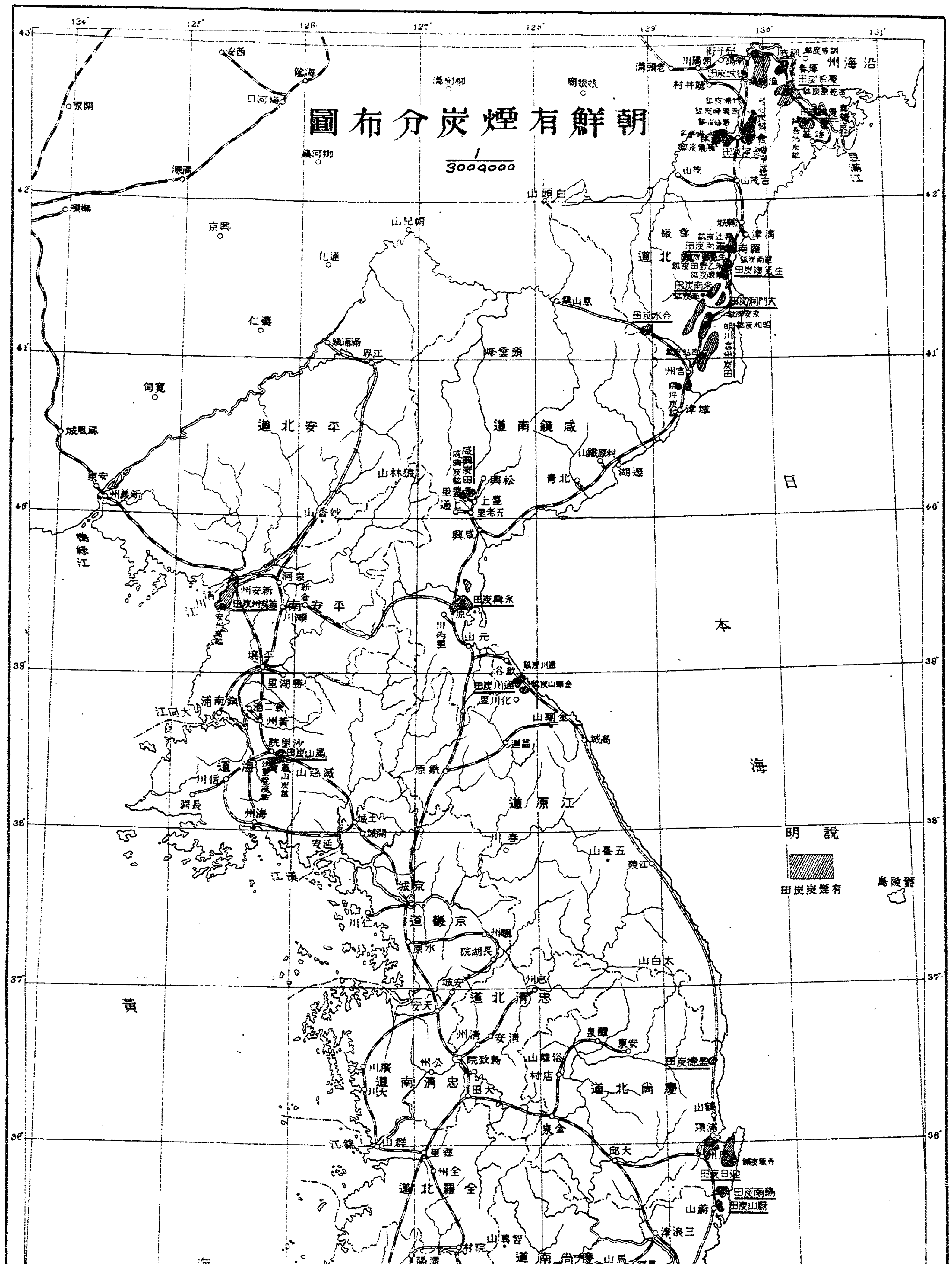
25× 32× 25×

朝鮮の有煙炭

目次

一　緒　言……一
二　炭　田……四
三　炭　質……六
四　産額及需要……一二
五　炭礦の一般狀況……一六
六　各炭礦の稼行概況……三〇
『附　錄』
朝鮮の石炭鑛業の趨勢……一一四

一


朝鮮有煙炭分布圖
1/3000000
說明
有煙炭田
日本海
黄海
咸鏡北道
咸鏡南道
平安北道
平安南道
黄海道
江原道
京畿道
忠清北道
忠清南道
慶尚北道
慶尚南道
全羅北道
全羅南道
濟州島

縮尺三百萬分之一

朝鮮の有煙炭

一、緒　言

朝鮮に産する有煙炭は全部褐炭で、九州又は北海道で採掘されてゐるやうな瀝青炭は今日迄全く發見されてない。而して有煙炭の分布される地域は主として咸鏡北道の鐵道沿線であるが、其の他平安南道、黄海道、慶尙南道、咸鏡南道にも點在してゐる。

今現在有煙炭礦で稼行してゐるものを列記すれば次表の通りである。

會社組織のもの

炭礦名	鑛業權者	本社所在地	資本金(拂込金額)	代表者
咸北炭礦	朝鮮合同炭礦株式會社	京城府南大門通	萬円 一二五(拂込濟)	取締役 田中榮八郎
鳳儀炭礦	同	同	同	同
咸興炭礦	同	同	同	同
會寧炭礦	鳳城炭礦株式會社	同	二〇五(拂込濟)	同
鳳山炭礦	同	同	同	同
生氣嶺炭礦	生氣嶺粘土石炭株式會社	東京市日本橋區江戸橋二ノ八	二五〇(一五四・五)	取締役社長 西脇濟三郎

阿吾地炭礦	朝鮮窒素肥料株式會社	咸鏡南道咸州郡興南邑湖南里	六、〇〇〇(拂込濟)	取締役社長 野口遵
永安炭礦	同	同	同	同
古站炭礦	內外鑛業株式會社	東京市麴町區丸ノ內ビル六八四	一〇〇(五〇)	專務取締役 岡野悌二
通川炭礦	東洋拓殖株式會社	東京市麴町區內山下町一ノ一	五、〇〇〇(三、五〇〇)	總裁 高山長幸
安州炭礦	明治鑛業株式會社	福岡縣戶畑市戶畑	二、〇〇〇(拂込濟)	取締役社長 安川清三郎
沙里院炭礦	同	同	同	同
羅南炭礦	合資會社羅南炭礦	咸鏡北道鏡城郡羅南邑生駒町二	一、六五〇(拂込濟)	代表社員 苅込輝

會社組織にあらざるもの

炭礦名	鑛業權者
竹浦炭礦	植森濟吉
青鶴炭礦	迫間房太郎
古乾原炭礦	麻生晉波
浦辻炭礦	浦辻東策
遊仙炭礦	岩村長市外二
訓戎炭礦	渡邊精吉郎
西儀米炭礦	渡邊鎚
丹心炭礦	米村勝市
朱南炭礦	土井卯三郎外三
院坪炭礦	吉松三郎外一
朱乙野田炭礦	野田清定
寺坂炭礦	藤木永吉
昭和炭礦	小林總一郎
龍峴炭礦	後藤連平
金剛山炭礦	新谷新七

此等有煙炭礦は概して邊陬の地にあつて消費地に遠いため販路の開拓に困難があり、且炭層もまた其の鮮に近い關係上その影響をうけて變化が多いなごにて內地のやうに大規模の採炭設備をなすに適してゐない缺點はあるが、今日尙炭礦の大半は運搬道路地並から上部の採炭をなして居り、地下の採掘でも五〇―一〇〇米の限度で、一般にずつと淺い部分を稼行してゐるので、機械的設備は簡單で見るべきものはないけれども、一面から見れば內地の炭礦に比し採炭條件が尙良好であることを示すものと言はねばならないのである。

加ふるに最近石油代用燃料に關し官民共に研究討議をなしつゝあるが、朝鮮に於ては昭和五年朝鮮窒素肥料株式會社が咸鏡北道明川郡永安にて石炭の低溫乾餾工場の建設に着手し、已に操業を開始して重油、パラフィン其他の製品を市場に出すやうになつて、漸く朝鮮褐炭の存在を明かにする機運に際會したのである。該工場の乾餾成績は處理量が少いのと操業開始後日が淺いため尙充分の成績を見る迄には達してゐないやうであるが、今日迄の成績によりて更に大量處理の工場設備をなすとすれば充分經營し得る迄の確信を得たものゝ如く、咸北炭田に於て將來大規模の乾餾工業が勃興するものと考へられるのである。

朝鮮の褐炭が工場用炭機關車用炭に使用せらるゝ外、煤煙の發生少なく且白煙であるといふ特徵有をするがため、特に都市燃料に適してゐることは周知のことで、雄基、羅津、淸津等の各港に於ける積込設備が改良さるれば優に內地各都市に向つて進出し、宇部、常磐の家庭向燃料炭の販路に進出することも決し

て不可能のことではないのである。

要するに今日迄捗々しき發展をなし得なかつた朝鮮の褐炭は京圖線の開通によりて内地進出の機運を誘導され、之に低溫乾餾工業の利用も加はりて此後漸次活氣を帶びるものと推察せらるゝ。

二、炭　田

朝鮮に產する有煙炭は褐炭で、炭層は全部新生代第三紀層に屬してゐる。今主要なる炭田の分布及各炭田の概要を述ぶれば次の通りである。

咸北炭田（明川・吉州炭田、合水炭田、鏡城炭田、會寧炭田、穩城・鍾城炭田、慶源炭田、慶興炭田）永興炭田。咸興炭田。安州炭田。鳳山炭田。通川炭田。迎日炭田。

明川・吉州炭田。 本炭田は明川及吉州兩郡に跨り、咸鏡線に沿ふて南北に長く分布してゐる地帶である。

此内吉州郡内の主要な區域は德山面渭南洞及城津郡鶴西面院坪洞で、前者は吉州邑の西南約一〇粁のところにあり、炭層は一・二―一・八米で稍薄いが、炭質よく機關車用炭に適してゐる。又院坪洞區域は渭南洞の西方五粁、鶴城面と德山面の境界にある狹い區域で埋藏量は極めて少ない。炭層は四米以上の厚い層と一・五米内外の層と上下二層があるが、炭質は第二種炭に屬するものである。

明川郡内の夾炭區域中主要なる部分は許儀洞及萬戸洞區域、龍洞區域、禮口味區域、永安區域、熊店洞區域、明澗洞區域等である。右の内許儀洞及萬戸洞區域と明澗洞區域は他の區域に於ける夾炭層の上部に位する所謂萬戸洞含炭層に屬するもので、炭層は比較的整然としてをり厚さも相當あるので炭量は豐富であるが炭質は劣つてゐる。而して許儀洞、明澗洞等の區域では一時採炭を試みたことがあるが、炭質が良好でない關係などで現在は中止し、目下内外鑛業株式會社が萬戸洞區域で採炭を繼續してゐるのみである。同區域に於ける炭層は三層で此内主として採炭してゐる本層と稱するものは一・四米前後の厚さを有してゐる。次に禮口味區域、永安區域及龍洞區域は龍洞含炭層と稱する下位の夾炭層に屬するもので、一般に前者に比して炭質は優つてゐるが、炭層の變化が甚だしい。此内禮口味區域は局部的に炭層が厚い部分もあるが、平均すれば一・五米内外で稼行し得らるゝものは一層である。永安區域は三層あり、内上層と中層が主要なるもので厚さ四米内外であるが、矢張り變化があり特に中層は屢々尖滅することがある。熊店洞區域は禮口味の西北約七粁、熊店洞を中心として北東から西南に細長く約一〇粁に亙つた區域で炭層は二層あるが、炭層の發達は他に比し小さいやうである。而して永安區域では現に朝鮮窒素肥料會社で永安炭礦を稼行し低溫乾餾工場に送炭してをり、禮口味區域には昭和炭礦が稼行してゐる。又龍洞區域にはもと齋藤明川炭礦が採掘をなしてゐたが、昭和四年に休止し、熊店洞區域は運搬が不便でまだ稼行するに至つてゐない。これ等の各區域の内炭質は昭和炭礦にて採掘される龍田炭が最も優れてゐる。

合水炭田。吉州郡陽社面及端川郡北斗日面に跨る約一千萬坪の夾炭地域で、略々合水を中心として穹窿構造をなし、その周圍は玄武岩の臺地を以て覆はれてゐる、基盤は石灰岩、變質水成岩及之を貫きたる花崗岩等で、炭層は目下分明して居る範圍では凝灰質頁岩中に〇・五—二・〇米の厚さを有する一層である。尙當區域は吉州・惠山鎭間鐵道の豫定線が横斷するところで已に吉州から當區域までは開通の運びに至つてゐる。

鏡城炭田、鏡城郡にある炭田の總稱で羅南炭田、生氣嶺炭田、龍峴炭田、雲谷洞炭田、七班洞炭田、朱南炭田等が包含されるが、內、雲谷洞及七班洞の兩炭田は炭層の發達不良で殆ど問題になつてゐない。

羅南炭田は羅南市街を中心とする約二百萬坪の略矩形をなす區域で、北部、西部及南部の丘陵に沿ひ市街の中心に向つて傾斜をなしてゐる。主なる炭層は二層でいづれも一・五米內外の厚を有してゐる。炭質は比較的灰分、水分多く發熱量が少ないため汽罐燃料としては適當しないが、火持ちがよいため滑津、羅南方面で溫突用に賞用せられてゐる。因に當區域では浦辻及羅南炭礦が隣接して稼行してゐる。

生氣嶺炭田は鏡城郡梧村面及朱乙溫面に跨り、走向は南北で鐵道線路に平行し、其東に約五粁南北に長く成層してゐる。傾斜は東で四〇—四五度の急傾斜をなし、東西の幅は約一・五粁である。炭層は多數あり三層群に分類することが出來るが、目下稼行されてゐるのは最下層群の三層で、その厚さは第一層約一米、他の二層は各々二米內外である。炭質は略々會寧炭田のものに近い。當區域には生氣嶺、朱乙野田の兩炭礦がある。

朱南炭田は鏡城郡朱南面にあつて、生氣嶺、明川の兩炭田の中間に位してゐる。主なる地域は三鄕洞、七鄕洞及大門洞の三區域で共に積込驛たる會文驛に遠く、三鄕洞西南一七粁、七鄕洞同二〇粁、大門洞同一二粁である。而して此等各區域の炭層は全部殆んど相平行してゐるので、走向約北四〇度東、傾斜東南三〇—四〇度を示してゐる。大體走向に長く傾斜に短かい矩形をなしてをり、露頭の延長は三鄕洞四粁、七鄕洞二粁、大門洞四〇粁である。炭層は數層あるが、稼行に堪るものは三鄕洞上層一・二米、本層六米の二層、七鄕洞は平均二米の一層、大門洞は一—二米の一層である。只此等の炭田の位置が前記の如く積出驛に遠いため石炭搬出に費用嵩み今日に至るも尙發達し得ない狀態にあるのである。

會寧炭田、會寧郡の北端及鐘城郡の南部一帶に亙る炭田で、會寧郡雲頭、鳳儀、碧城、八乙、龍興、花豐の各面及び鐘城郡古邑面の大部分、南山及龍深面の一部に亙る廣大なる地域を包含してゐる。この區域は一般に道路及鐵道が發達し交通が便であるために早くから開發せられたるものである。炭層の厚さ、走向及傾斜等に對する變化は吉州・明川炭田と同樣で頗る多い。大體主要炭層は三層であると考へられるが、各坑內にて目下稼行してゐる炭層を見るに雲頭面地域（咸北炭礦）及遊仙炭礦では一—三米のもの三層、鳳儀面（鳳儀炭礦）にては七米以上のもの一層、八乙面（會寧炭礦及西儀峰炭礦）では一—一・五米のもの一層、花豐面（竹浦炭礦及弓心炭礦）にては一・五—三米のもの一層となつてゐる。品質は雲頭、

鳳儀兩面の方よく他は幾分低下してゐるやうである。炭層の走向はほゞ南北で東に傾斜し、花崗岩の隆起及斷層によつて常に炭層の連絡性を失なつてゐるが、全般的に見て本炭田は咸北炭田換言すれば朝鮮有煙炭田の中樞をなすところで、會寧、咸北、鳳儀、遊仙、竹浦等の有望なる炭礦が集中してゐる。

穩城・鍾城炭田。 穩城郡穩城、美浦、永忠、永瓦の各面、鍾城郡鍾城、龍溪、豐谷、南山面に跨る地域である。基盤の地質は主とし古生代水成岩で、第三紀層は南北に細長く穩城邑附近から南山面に至る約三六キロの延長と、北蒼坪附近から岐れて豐谷面の東を通る一五キロの延長のものがある。共に主として東傾斜であるが、深部は南北の斷層で遮斷されてゐると考へられる。炭層の主なるものは〇・九―一・五米厚さの一層で二三枚のはさみを有し純炭部としては一米内外である。當區域は一般に有望なる部分なく今日迄稼行されてゐるものはない。

慶源炭田。 本炭田には訓戎炭田（慶源北部炭田）及び古乾原炭田（慶源南部炭田）が之に屬して居る。訓戎炭田は慶源、穩城兩郡に跨り、慶源及訓戎間の豆滿江流域を占むる地域で 圖們線に沿ひ琿春に相對して居る。即ち炭層は訓戎の北豆滿江岸からほゞ南北の方向に走つて慶源面松川洞の南まで約八キロ連續してゐる。主要炭層は部分的に變化はあるが、全體的に見れば〇・六―一・五米、走向北二〇度東、東傾斜東で勾配は緩である。基盤は花崗岩及古生代水成岩である。古乾原炭田は慶源郡龍德、東原、安農の三面に跨つてゐるが、柳樹洞、龍西洞に連なる走向ほゞ南北、傾斜東のものと、承良洞、龍北洞、龍南洞に至る走向同じく南北、傾斜西のものと互に向斜の形をなしてゐる。炭層は前者に於て〇・九―一・五米であるが、後者に於ては厚く〇・九―三・〇米にて主要なるものは共に二層以上あり炭質も優良である。右の内東林里、龍北洞の間は特に炭層發達し有望なる所と考へられる。

慶興炭田。 本炭田に屬するものは阿吾地及青鶴洞の二區域である。此内青鶴炭田は圖們線の青陽洞、四會驛の中間に於て線路の兩側に三箇所散在してゐるが、其成層區域は極めて小で、炭層は露頭部分は薄いが中央部では局部的に四・五―六・〇米に達する極めて厚い部分がある。阿吾地炭田は慶興郡上下面及慶源郡有德面に跨る地域で、阿吾地驛附近から起り豆滿江の支流阿吾地川流域に沿ふた盆地一帶を占め、東西一〇粁、南北六粁、夾炭面積一、二〇〇萬坪に及ぶ廣大な地域である。夾炭層の基盤は古期の水成岩、花崗岩等で露頭は基盤をなしてゐる丘陵に沿ふてゐるため略楕圓形をなし盆地の中心に向つて傾斜をなしてゐる。而して殆んど此盆地内には基盤の露出してゐるところがないため恐らく鮮内稀に見る大炭田と考へられ其埋藏量も相當多いものと推定せられる。露頭部分では稼行に値する炭層は二層で〇・八―三米の間にあるが、此外深部の試錐によりて九米（純炭五米）に達する炭層が發見されてゐる。該層の存在する範圍はまだ判明しないが、恐らく露頭に近い部分では現はれてゐない最下層のものと思はれるので、右の厚層が廣い範圍にあるとすれば當炭田の主要炭層は三層となり其埋藏量は更に增大することになるのである。

尙慶源、慶興炭田の炭質は古乾原、青鶴炭は遊仙、咸北、其他の一等炭に略匹敵しており、其他は幾分

劣れるやうであるが相當機關用にも使用されうるものである。慶源炭田には目下訓戎炭礦、古乾原炭礦、慶興炭田には阿吾地炭礦、靑鶴炭礦の稼行中のものがある。

永興炭田。 本炭田は咸鏡南道定平、永興及高原の各郡に亙る廣大な地域を占める炭田であるが、大部分粘土、砂礫等の河成岩層によりて蔽はれ、現在發見されたものは僅に高原郡高原邑、永興郡仁興面鎭興場及定平郡文山面、歸林面等の附近に露出せるもののみである。此内定平郡所在のものは稍發達したところで、片麻岩を基盤とする三紀層中に上下二層あつて一般の走向は略北三〇度西、傾斜北一五―二〇度である。而して上層は一米内外で三、四年前永興炭礦が採掘したことがあるが、目下休業してゐる。尙下層の露頭は東側の山麓にあるが、まだ探鑛されてゐない。

咸興炭田。 本炭田は咸鏡南道新興郡加平面に在りて城川江支流の流域を占めてゐる。走向は東北東、傾斜北二〇―二五度西である。炭層は三層で上部の二層は厚さ比較的平均してゐるが、最下層は變化多く現在は主に上部の二層を採掘してゐる。上層の厚さは大體〇・三―二米、平均一米で、中層〇・四―一・八米、平均同じく一米で、下層は一米に達するところがあるが新坑の肩部では尖滅してゐる。朝鮮合同炭礦株式會社の咸興炭坑は本炭田に於ける唯一の稼行炭礦で鮮內にて最も早くより世に知られたものである。

安州炭田。 京義線萬城驛の西方約一三粁、立石面立石里、聖法里、銅壺里、內洞里を限る線より西方海岸方面に展開せる平坦地に分布する夾炭地帶で、基盤は中世層の砂岩及頁岩の互層である。尙立石面より新安州に通ずる道路に沿ふて第三紀層の點在するを見るが殆んど問題になる程度のものでない。而して炭田の中心は銅壺里から內洞里に亙る區域で、就中內洞里に於てよく發達してゐる。炭層は數層あるが稼行してゐるは最下位の一層で、舊坑では發達した部分があつたが、現在の採炭箇所に於ては一・五―一・七米となり更に西に行くに從ひ中央の夾み發達し之によりて上下に分離され〇・七―〇・八米の二層になつてゐる。鐵道局機關車用に撫順炭と配合して最も多く用ひられる。本區域には明治鑛業株式會社の安州炭礦が稼行してゐるのみである。

鳳山炭田。 本炭田は黃海道鳳山郡文井面にあり、京義線新鳳山驛の南に緩漫なる起伏をなす石灰岩を基盤とし、略御水里を中心として鐵道線路から松山里に亙つて東北に延びてゐる長方形である。炭層は南方にては走向北六〇度東、傾斜北一八度を示してゐるが、北方にては走向漸次北に彎曲して北端にては走向北二〇度東、傾斜西一五度前後になつてゐる。炭層は約一五層發見されてゐるが、稼行に耐ふものは四―五層で大體各層の厚さは一―三米の間であるが、鳳山炭礦にて本層と稱するものは本區域の東南部で發達し七米以上の厚層をなしてゐる。而して從來鳳山炭礦にては三―四層を稼行してゐたが、目下當炭田で稼行されてゐるは主として三層で、鳳山炭礦では右三層の內主に本層及その上位の層の二層、沙里院炭礦では本層の下位にある一層のみである。而して鳳山の本層は沙里院炭礦鑛區にては鳳山炭礦に於けるやうには厚くないが、一・五―一・七米程度の厚さに廣く分布してゐるやうに思はれる。本地域で稼行してゐるのは

前記の鳳城炭礦株式會社の鳳山炭礦と、明治鑛業株式會社の沙里院炭礦の二礦である。

通川炭田。本炭田は江原道通川郡庫底港の海岸一帶を占め、北は踏錢面より南は通川面に跨り西北から東南に長く發達した地域で、局線東海線はその中央を貫通し、且庫底港に近いため比較的交通便である。炭層は花崗岩及花崗片麻岩を基盤として數層發見されてゐるが、主要なるは三層で基盤の起伏によりて頗る變化し厚さは一定してゐない。しかし大體上層一・五―二米、中層及下層一―一・五米であるが、各層とも夾み及硬炭多く、純炭部として採掘しうる部分は少ないやうである。而して炭層の一般走向は北二〇―四〇度東、傾斜北一〇―二〇度であつて、現在稼行中のものは通川炭礦及金剛山炭礦の二礦である。

迎日炭田。本炭田は慶尙北道迎日郡東海面、峯山面、長鬐面、滄川面の各個所に點在してゐる。共に炭層頗る多くその數七層群に及んでゐるが、大部分〇・三―〇・六米の薄層にて稼行に堪へるものは少ない。只局部的に發達した所があるが、連續性なく次第に薄くなりて尖滅することが多い。右の內比較的發達してゐるところは東海面都邱附近、長鬐面長鬐附近で、後者に於ては現在寺坂炭礦が稼行してゐるのみである。この附近の炭層は走向ほゞ北東、北傾斜で厚さ一・二―二・五米であるが、夾み多く純炭部としては其六―七割に過ぎない。炭質は褐色を帶びた二等炭である。

尙本炭田附近に於て慶州郡川北面花山里附近（慶州炭田）及同郡陽南面端洞里附近（蔚山炭田）の二炭田がある。前者は八米內外の厚層で、後者も三米の厚さを有してゐるが、等しく夾み多く且炭質がよくないので、一時稼行したものもあつたが、永續しないやうである。

以上各炭田に就て概述したのであるが、今總括的に炭層の層位に就て說明すれば次の通りである。

朝鮮に於ける有煙炭は主として第三紀層中に挾有せらるゝものであるが、稀には中世代の地層中に含有せらるゝ場合がある。しかし今日迄該地層中に發見せられたものは凡て薄層で期待し得るものがない。

第三紀層含炭層は大體に於て上下五層に區別することが出來る。最下部のものは咸鏡北道慶源及慶興地方では下部夾炭層、會寧地方では遊仙累層、鏡城及び明川、吉州地方では龍洞層と稱せられ、咸南新興附近のものは長豐里層と命名せられてゐる。其他鳳山炭田、安州炭田の地層も是等の地層に該當する。該地層は朝鮮に於ける有煙炭としては最も重要なもので、炭層枚數の多い場合は十數層を挾有する場合があり、厚いところは九米以上に達するものがある。しかし是等の炭層中主要なるものは含炭層の下底に挾有せられ、基盤岩に接してゐるため其起伏の影響を蒙ることが大で、內地に見る如き炭層の厚さ及層數一定せず、同一坑內の同一炭層に於てさへ僅か六〇―七〇米の狹い範圍內に於て七米以上の厚層が三〇糎內外に尖滅せらるゝやうな實例は頗る多い。

斯の如き炭層の變化は基盤をなす岩石が第三紀層の沈澱當時は山脉及溪谷をなしてゐたのに其後その上に直接第三紀層が水によりて沈澱成層したゝめ或る處は陸地となつて沈澱なく或る處は沼澤となつて有機物の沈澱成層せられたるためである。

次に重要なる含炭層は萬戸洞層である。これは明川、吉州地方に廣く分布せらるゝ地層で、其他の地域に於て是に該當するものは咸鏡北道會寧附近の行營累層、咸鏡南道新興、永興附近の新興層、慶尙北道迎日地方の長鬐層群である。夾有する炭層枚數は多き部分は十數層に達するが、主要なるものは三層で、しかも一般に炭層薄く普通〇・八米内外であるが、局部的に二米に達するところがある。是等の炭層は一般に基盤に遠ざかつてゐるため前記の下部の夾炭層のやうに炭層の厚さに急激なる變化をなすことは少ないが、炭質は下部の夾炭層のものに比して劣り且風化の程度も甚だしいため各所に稼行に着手するものはあるが、多くは永續せず現在では僅かに咸鏡北道明川郡の古站炭礦及慶尙北道迎日郡の寺坂炭礦のみが繼續してゐるのみである。

龍洞層の上位にある中部夾炭層は分布が甚だ狹く、僅かに朱南炭田こ龍峴炭礦附近のみが賦存してゐるのみで、朱南炭田では石炭の發達不良であるが、龍峴炭礦附近では發達良く現在採炭せられてゐる。

其他最上部の迎日層群にも慶州郡川北面地方に炭層發達の良い處があるが、風化が甚だしいため目下採炭を中止してゐる。大體に於て迎日層群及坪六洞層は薄層のみであるのこ、炭質粗惡のため將來を期待しがたい。

現在稼行せらるゝ炭層の大部分は最下部の含炭層に挾有せらるゝ炭層を採炭してゐるので、是等の炭層以外はあまり期待し得るものはない。

元來朝鮮に於ける含炭層分布區域は互の連絡なく對比統一は困難であるが大體次表の如く統括し得られる。尙表中中央は炭層の上下の位置を表はし、炭田及炭礦欄に記入せる炭田及び炭◎名の位置は其炭田及び炭礦の主要炭層の位置を示すもので、層名欄に記入してゐる地層名は炭層の所屬地層を表はすものである。

層名			炭田及炭礦名
迎日層群 瓶山累層			慶州、南陽
――不整合――			
長鬐層群 新興層 行營累層	萬戸洞層		古站、許義洞、虎山洞、明澗洞、八乙、旭、細洞、寺坂、盈德
	咸鏡洞層		
	坪六洞層		迎日(一部)、鎭興里、永興合水(一部)、鍾城、穩城(一部)、端川(一部)
――不整合――			
中部夾炭層 （朱南炭田に於ける）			龍峴
――不整合――			
			羅南、羅北、涌辻、通川
龍洞層、遊仙層			
長豐里層			生氣嶺(一部)、安州
壤源興下部夾炭層			咸興、吉州、陸坪、昭和、齋藤明川、永安、大門洞、朱南、雲谷、生氣嶺、會寧、鳳儀、咸北(鷄林)、遊仙、西鐵峯、竹浦、花豐、朱乙、野田、熊店、訓戎、鍾城(一部)、穩城(一部)、古乾原、阿吾地、青鶴洞、沙里院、鳳山、弓心、
――不整合――			
基盤岩			

三、炭質

朝鮮に產する有煙炭は石炭の分類法によつて異なつて來るが、普通褐炭の部に屬するもので、ほゞ內地の常磐炭及宇部炭に類似してゐる。

しかしながら、これを精細に見る時は炭質に可成りの差異を見出すことができるので、外觀黑色を帶び且塊狀に割れて瀝靑炭に近い良質のものがあり、一方黑褐色で板狀に割れて亞炭に近い品質の劣つたものがあるが、大部分は塊狀又は立方形の割目を有し、色は一樣の鈍黑色を帶びるか又は鈍黑色の炭基に光澤ある黑色の輝漆炭の横筋目を有してゐる。燃燒に際して幾分黑煙を生ずるものもあるが、一般に靑白色の煙を發し且煤煙が少ない。而して殆んご全部不粘結であるこごは朝鮮無煙炭ご同樣であつて、石炭に琥珀を含むものが多いのは特徵の一つである。

しかし一般から見れば九州及北海道炭に比して風化の速度が大であるこご、水分及灰分が幾分多いこご、從つて發熱量が少しく低いこごは免かれがたいごころである。

今日市場で商品こして取扱はれてゐる朝鮮褐炭の分析値（百分率）を總督府燃料選鑛研究所で發表したごころに依り見るご大體揮發分三五—五〇、固定炭素三〇—五〇、灰分五—一五、水分一〇—二〇、硫黃分〇・四—一・二、比重一・三二—一・四五で、發熱量は最高七〇〇〇カロリーから最低四〇〇〇カロリーの間にあるが、第一種炭は五五〇〇—六〇〇〇カロリーのものが多く、第二種炭は四五〇〇—五〇〇〇カロリーのものが多い。

今最近研究所にて分析したるものゝうちより少しく摘錄すれば次表のやうである。只玆に考ふ可きこごは石炭の分析資料を採るこごは極めて困難のこごで、二、三の資料の分析によつて炭礦又は炭田の平均値ご見做すこごは不可能のこごで、左表は大體の見當をつけ得る程度のものご考へればよいのである。

朝鮮有煙炭分析表（%）

產地	水分	揮發分	固定炭素	灰分	硫黃	發熱量（カロリー）	灰の色	比重
咸北炭	八・〇一	三〇・二〇	五一・九四	九・八五	〇・三三	六、三三三	暗褐	一・三九九
同	一三・六〇	三四・二三	四五・七三	六・四四	〇・六五	五、九九九	淡褐	一・三三〇
會寧炭	一五・〇八	二七・四九	四九・九二	七・五三	一・三五	五、四五〇	橙	一・三五〇
同	一六・三三	三二・一五	四五・三七	六・一六	一・三六	五、三六八	黃灰	一・三六〇
遊仙炭	一三・六六	二四・四七	五六・一五	五・七二	〇・五七	七、〇九六	淡褐	一・三三五
同	三・五八	三七・二三	四九・八一	九・三八	一・一七	六、八六九	褐	一・三六五
鳳儀炭	九・六九	四一・〇四	四一・五六	七・七一	〇・四九	五、八三七	黃灰褐	一・三四〇
同	一四・一五	三二・七四	三八・九九	一四・一二	〇・七八	五、三五一	淡褐	一・三八五
竹浦炭	一一・三七	四七・〇〇	二七・九九	一三・六四	〇・八〇	五、一九〇	淡黃灰	一・三七〇
同	一五・七七	三一・五八	四三・一三	九・五三	〇・七八	五、〇二六	褐	一・三九〇

訓戎炭	一五・八〇	三七・七五	三五・四〇	一一・〇五	一・四七	五、三五八	脂褐	一・三四四
同	一七・一五	三五・三六	三四・八三	一二・六六	〇・九二	四、〇〇五	淡褐	一・四一七
古乾原炭	一七・二九	三九・〇三	二八・一五	一五・五三	〇・三九	六、〇八五	黄褐	一・三三九
同	七・一三	三七・一一	二三・五〇	三二・二七	〇・四五	四、七六八	灰白	一・四七九
阿吾地炭	一六・二八	三九・二九	三六・一三	八・三〇	〇・五七	五、五九〇	淡褐	一・三一四
同	三二・〇〇	三〇・三〇	二七・六五	一〇・〇五	〇・二三	四、五七五	淡褐	一・三五八
青鶴炭	一三・八九	四五・七四	三四・一三	六・二四	〇・二九	五、八二三	淡褐	一・三二五
同	一五・八二	四三・八四	三四・五三	五・八一	〇・四〇	五、六八六	淡褐	一・三二五
浦辻炭	一四・五九	三九・三七	三〇・八四	一五・二〇	〇・八一	四、七〇七	灰黄褐	一・三八五
同	二〇・七五	四〇・七六	二五・一八	一三・三一	〇・三〇	四、五四四	褐	一・三三〇
生氣嶺炭	一三・〇九	四四・九六	三四・三九	七・五六	〇・八〇	六、〇二八	濃灰	一・三一四
同	二〇・一六	三六・四四	三一・八五	一一・五五	〇・九九	四、八〇二	淡赤褐	一・三三〇
龍峴炭	一三・九九	三九・七三	三〇・八五	一五・四三	〇・三七	五、三八八	淡褐	一・四三九
同	一一・六八	三三・五二	三三・〇八	二一・七二	〇・六三	四、三五三	淡褐	一・五〇一
朱南炭	一七・四九	四二・九一	三〇・五六	九・〇四	〇・三九	五、四七二	灰褐	一・三一八
同	二〇・五三	三四・三五	三一・三〇	一三・八二	〇・二七	四、七六八	赤褐	一・三六五
永安炭	一九・四六	四〇・六四	三〇・八六	九・〇四	〇・七六	五、〇七八	淡灰	一・三一六
同	一五・六八	三九・六六	三〇・八七	一三・七九	一・〇六	四、九二三	褐	一・四〇三

古站炭	一八・八〇	三六・四一	三一・九〇	一二・八八	〇・五六	四、七三三	暗褐	一・四五六
同	一八・三八	三五・四七	三一・八三	一四・三二	〇・五八	四、六〇三	暗褐	一・四五九
昭和炭	九・六二	四九・四四	三四・四〇	六・五四	〇・七二	六、一一四	淡褐	一・三一八
同	九・一一	四二・八九	三四・八六	一三・一四	〇・五三	五、七二〇	灰白	一・三六五
院坪炭	一八・〇四	三八・一八	二九・六四	一四・一四	二・三三	四、五三九	灰	一・四三三
同	一八・九二	三七・〇三	三〇・七五	一三・三〇	三・四六	四、四五九	灰	一・四二三
咸興炭	一五・三一	三八・六八	三九・七九	六・二二	〇・八四	五、五二三	褐	一・三五二
同	一七・七七	三四・二三	三六・三八	一一・六二	〇・五八	四、九三一	濃灰	一・三九一
通川炭	一〇・六四	二〇・一五	四九・三七	一九・八四	一・二一	四、四一六	褐	一・三五〇
同	二三・五五	三三・〇五	三〇・六〇	一二・八〇	〇・九六	四、一三〇	淡黄褐	一・三八五
寺坂炭	一三・〇〇	三〇・三五	三四・九五	二一・七〇	一・六〇	四、八〇六	淡褐	一・四三七
同	二一・六二	二七・一三	二六・九九	二四・二六	〇・八一	三、七四五	淡褐	一・四九一
安州炭	一五・二二	三五・一一	三六・九七	一二・七〇	〇・八四	五、一三三	褐	一・四〇三
同	一七・四七	三三・八五	三四・一七	一五・五一	〇・三五	四、七六八	褐	一・三五〇
沙里院炭	一八・六九	三三・四四	四二・五六	五・三一	一・二七	五、六三六	褐	一・三三三
同	一五・八六	三三・一九	三七・三二	一四・六三	二・八七	四、九五〇	暗褐	一・四三六
鳳山炭灰	二一・九七	三三・四五	三八・九七	六・六一	一・七四	五、三七四	灰白	一・四〇二
同	二三・五〇	二九・二三	三九・九三	七・三四	〇・八二	四、八六九	黄褐	一・三八一

此等の石炭は殆ど全部總督府鐵道局の機關車及其他の局用炭に消費されて九州炭又は撫順炭等と混炭し

又は單獨にて使用されてゐるが、前記のやうに、煙が薄いために特に家庭燃料として適當してゐるのである。目下內地大都市では煤煙の防止に努めてゐる時であるから今少しく港に於ける積込費を低下することになれば大阪、東京其他に於て宇部炭、常磐炭と競爭し得る可能性は充分あるものと考へられる。

一般に朝鮮の褐炭は九州、北海道炭に比して塊炭の採收率が大で四分乃至六分目篩によれば八〇%內外の塊炭が得られ、粉炭二〇%內外に止まつてゐる。しかしてその粉炭も鐵道局用炭には切込炭として納入するために或程度の消化は出來るのであるけれども全體として鮮內に於ては各礦とも粉炭の所理には困難を感じてゐる。之は內地と異なり鮮內工場の汽罐が大部分手焚であるためで、ストーカーとか、微粉炭燃燒裝置を備へてゐる所が少ないのによるものである。この處分法として明治鑛業株式會社の沙里院炭礦では同礦の洗選粉をピッチにて固めマセック煉炭として一般家庭用に販賣せんと計畫し已に實行に移つてゐることである。

又朝鮮の褐炭が低溫乾餾に適してゐることも前に記した通りであるが、此點に就て九州炭と比較してみると實驗上から見たタールの含有量は大なる差はないけれども、九州炭には高價なるパラフィン分が極めて少ないのに對して朝鮮褐炭は特に咸北炭はパラフィン分が多く含有されてゐることが有利である。しかし朝鮮褐炭は灰分及水分が幾分多い關係上半成コークスの品質が低下する缺點があることは否み得ないところである。

因に同じく燃料選礦研究所でなした朝鮮褐炭のアソーブス分析の結果を摘錄すれば次表の通りである。

朝鮮炭のアソーブス分析表（%）

石炭名稱	水分	タール	瓦斯	固定炭素	灰分
咸興炭	二一・九七	一一・〇〇	一五・〇三	三五・二〇	一六・八〇
會寧炭	二四・五四	一三・五〇	一一・五六	三五・九九	一四・四一
羅南炭	二五・〇六	一四・〇〇	一六・九四	二七・七七	一六・二三
竹浦炭	二三・一〇	一五・二六	一八・一四	三一・八八	一一・六二
鳳山炭	二七・五五	五・〇〇	一五・四五	三八・七九	一三・二一
鳳儀炭	二三・五六	一一・五〇	一六・九四	三八・七四	九・二六
安州炭	二六・五〇	七・五〇	一三・五〇	三六・九九	一五・五一
鶴林炭	二四・五四	八・五〇	一四・四六	四一・九三	一〇・五七
生氣嶺炭	二六・五〇	一五・〇〇	一三・四五	三九・六九	五・八二

四、產額及需要

產額 次表で明かであるやうに朝鮮の有煙炭は明治四十三年僅に年額三千瓲であつたものが、大正元年に一萬瓲、同九年に一〇萬瓲、同十三年に二〇萬瓲弱、同十五年に三〇萬瓲强、昭和四年に四〇萬瓲と漸次增產を續け、昨昭和七年には四五萬瓲に達してゐるが、本八年には更に增加する見込みである。

朝鮮有煙炭の累年產炭高（單位瓲）

明治四十三年	同四十四年	大正元年	同二年	同三年	同四年	同五年	同六年
三、一九五	四、四〇七	一〇、六九九	八、七〇四	二六、六三六	二四、五三三	二八、九五四	四一、一三七
同七年	同八年	同九年	同十年	同十一年	同十二年	同十三年	同十四年
四五、六三三	五七、六七〇	八八、四八五	一〇五、八〇四	一三八、四八二	一九七、四八五	一八四、三〇七	二六二、九九三
昭和元年	同二年	同三年	同四年	同五年	同六年	同七年	
三三一、三九五	三一七、二五五	三五〇、八六五	三五九、六五七	四〇五、六六一	四一七、五五六	四三二、〇三二	

今昭和七年の炭礦別產額をその順位に從ひ列記すれば次表の通りである。

昭和七年炭礦別產炭高（單位瓲）

順位	炭礦名	鑛業權者	昭和六年產額	同七年產額
1	成北炭礦	朝鮮合同炭礦株式會社	九七、二四八	七五、六一一
2	安州炭礦	明治鑛業株式會社	五五、六八七	六六、三〇二
3	永安炭礦	朝鮮窒素肥料株式會社	一四、七三一	四六、九八〇
4	鳳山炭礦	鳳城炭礦株式會社	五八、三五五	四一、六六二
5	生氣嶺炭礦	生氣嶺粘土石炭株式會社	四〇、〇三四	三六、一一四
6	咸興炭礦	朝鮮合同炭礦株式會社	二〇、八五五	三二、九八九
7	遊仙炭礦	岩村長市	一九、二一一	三一、二五四
8	昭和炭礦	小林總一郎	三五、一二六	二八、三三八
9	鳳儀炭礦	朝鮮合同炭礦株式會社	一九、一五一	二〇、四五一
10	沙里院炭礦	明治鑛業株式會社	二、〇〇九	一五、八一九
11	會寧炭礦	鳳城炭礦株式會社	一五、七九一	九、〇五〇
12	龍峴炭礦	後藤連平	—	八、三六八
13	青鶴炭礦	迫間房太郎	六、四二九	七、〇〇三
14	竹浦炭礦	植森濟吉	六、三一三	六、六八六
15	古站炭礦	內外鑛業株式會社	五、〇九二	四、三四五
16	阿吾地炭礦	荒井初太郎	四、二四〇	三、九六六
17	通川炭礦	東洋拓殖株式會社	六、〇五六	三、四七九
18	浦辻炭礦	浦辻東策	四、一三三	三、七二三
19	朱乙野田炭礦	野田淸定	二、〇六三	一、九八〇
20	訓戎炭礦	渡邊精吉郎	一、〇〇三	一、九五二
21	羅南炭礦	合資會社羅南炭礦	一三一	一、六〇五
22	朱南炭礦	土井卯三郎	一、七〇三	一、一九八
23	金剛山炭礦	新谷新七	三一〇	一、一一三
24	弓心炭礦	坂井田貞治	—	一、〇三八
25	院坪炭礦	吉松三郎	二七七	九三六

26	古乾原炭礦	麻生晉波	六五〇	四八〇
27	寺坂炭礦	藤木永吉	一四五	四〇〇
28	西價楽炭礦	渡邊龜	四〇〇	三〇〇
20	林中炭礦	藤木永吉	五四五	—
	合計		四一七、五七八	四五二、〇三三

輸移出　朝鮮の有煙炭の輸移出は昔から徴々たるもので、輸出は會寧地方の石炭が對岸間島に送られる程度であるが、昨昭和七年は前年に比し倍加し、會寧、濱關鎮、南陽、上三峰等の豆滿江流域から輸出したものが大部分を占め、新義州經由安東に向けられたるものは極めて少ない。次に內地移出は今日迄試驗的に數度咸北炭及生氣嶺炭を東京、大阪に向け搬出したのであるが、當時內地炭の市價が安かつたのと、本船積に失費が嵩んだのと、輸送中粉化する數量が多かつたためにあまり成功しなかつたやうである。しかしながら羅津、雄基、淸津等に於ける積込費も漸次遞減されるものと思はれるので、積替へによる粉炭化を防ぐために汽船を用ひず、大型の補助帆船を用ひるなどの方法をなし、經費を節約すれば充分宇部、常磐炭に對抗しうるものと考へられる。尤も昨今は鮮內の需要に追はれてゐる狀勢であるから內地移出はあまり計畫されないであらうが將來は內地の都市も朝鮮褐炭の一市場と考ふべきである。

今大正十三年以降の朝鮮有煙炭の內地移出高を示せば次表の通りである。

朝鮮有煙炭の輸移出高（單位瓲）

年次	大正十三年	同十四年	昭和元年	同二年	同三年	同四年	同五年	同六年	同七年
輸出	四四三	二	一三六	三三	八四	一七六	八一	二三三	一、〇四五
移出	六、九一四	六、七九九	二、七三六	二、一六〇	五、二九一	四九四	五七一	八、四四五	一、三〇一
總計	七、三五七	六、八〇一	二、八七二	二、一九三	五、三七五	六七〇	六五二	八、六七八	二、三四六

用途別需要高　朝鮮の有煙炭を用途別に正確に分類することは困難であるが、昭和七年販賣高四五・二萬瓲の內譯を用途別に分類すれば大體左表の如く推定せられる。（單位千瓲）

- 總販賣高　四五二
  - 鮮外搬出高　二
    - 輸出　一（主に間島方面）
    - 移出　一（主に大阪、名古屋）
  - 鮮內使用高四五〇
    - 鐵道用
      - 局用　二〇九
      - 私鐵用　八
    - 船舶用　四
    - 工場及家庭用　一七六
    - 山元消費　五三

卽大半は鐵道局の機關車用炭として消費せられる。而して同七年の鐵道局用炭合計三六七、五七二瓲のうち朝鮮有煙炭は二〇八、七三八瓲を使用してゐるのであるから約五七％の消費となるわけである。尙私

設鐵道の總消費高三〇、一三四噸のうち八、五二四噸の朝鮮炭を使用してゐるので、朝鮮有煙炭の消費高は僅々總消費高の二八%に過ぎないことになるのである。

五、有煙炭礦の一般狀況

現在稼業してゐる炭礦の坑口名を示せば次のやうである。

會寧炭礦	新第一坑（斜坑）
咸北炭礦	第一坑、第二坑、第三坑（全部斜坑）
遊仙炭礦	第一坑、第二坑、第三坑（全部斜坑）
鳳儀炭礦	第一坑、第二坑（全部斜坑）
西儀峯炭礦	本坑（水平坑）
竹浦炭礦	第二坑、第三坑（全部水平坑）
弓心炭礦	本坑（斜坑）
背鶴炭礦	本坑（水平坑）、第二坑（斜坑）
阿吾地炭礦	龍淵洞坑、栖鳳洞坑（全部水平坑）
古乾原炭礦	本坑（水平坑）、第二坑（斜坑）
訓戎炭礦	本坑（水平坑）
羅南炭礦	本坑（斜坑）
浦辻炭礦	本坑（斜坑）
生氣嶺炭礦	第二坑、第三坑（全部斜坑）
朱乙野田炭礦	本坑（斜坑）
龍峴炭礦	第一坑（斜坑）
朱南炭礦	本坑（水平坑）
永安炭礦	第二坑、第三坑、第四坑（全部斜坑）
昭和炭礦	第一坑、第二坑（全部斜坑）
古站炭礦	中切坑（水平坑）
院坪炭礦	本坑（水平坑）
成興炭礦	新第一坑、新第二坑（全部斜坑）
通川炭礦	第一坑（水平坑）
金剛山炭礦	本坑（水平坑）
寺坂炭礦	本坑（水平坑）
鳳山炭礦	本坑、末廣坑、新七坑、新一坑（全部斜坑）
沙里院炭礦	第一坑、第二坑、第三坑（全部斜坑）
安州炭礦	第三坑（斜坑）

右表に於て比較的小規模の稼行をなしてゐる炭礦は水平坑道にて、運搬道路の地並から上部の炭層を採

25×10 32×10 25×

掘してゐるが、他の斜坑採炭をなしてゐるものでも大部分垂直一〇〇米以内で、最も深部を採掘してゐる安州、咸北、生氣嶺の各礦でも一五〇米内外である。之に依つて見れば朝鮮の有煙炭礦は一般に內地の各炭礦に比して地表から淺い部分を稼行してゐるので、機械設備も極めて簡單であるが、尙採炭條件良好で將來に發展する餘地があると言ふことが出來るのである。

現在稼行してゐる炭層は安州、會寧、古站、通川の各礦のやうに〇・八―一米の薄いものもあり、又鳳山、鳳儀、朱南、院坪、昭和、龍峴等の各礦のやうに三―八米の厚いものもあり、其他二米內外の採炭に都合よい中庸の厚さのものもあるが、一般に厚さ、走向、傾斜共に變化が多いため、內地の炭礦のやうに規則的の集約採炭をなすことが困難で、安州、會寧等の炭礦のやうに薄き炭層に對して、硬充塡による長壁法を應用してゐるところもあるが、大部分は殘柱式によつて採炭をなしてゐる。而しながら最近は漸次坑內の採炭個所も深くなり、且最近勞働者の拂底及勞銀の高騰に刺戟されて比較的採炭高の多い安州、沙里院、遊仙、咸北、永安等の炭礦では岩石掘鑿に鑿岩機を使用するやうになつて來たのであるが、炭層に鑿岩機を使用してゐるのは永安炭礦一礦のみで、コール・ピックを使用してゐるは現在沙里院のみである。しかし近き將來に於て漸次各礦で斯くの如き機械が用ひられるに至るものと考へられる。又火藥は殆ど岩石掘進のみに使用されてゐるが、之も漸次炭層掘進に應用されて發破掘をなさんとする傾向になりつゝあるのである。爆藥は主としてゼリグナイトであるが、永安炭礦の如く硝安爆藥を使用してゐるところもある。

支柱法は內地の各礦と何等異るところはない。枠材としては大部分赤松であるが、安州炭礦、永安炭礦等のやうに主要坑道に於ける押木に四五―六〇封度のビームを代用し、重壓甚だしきところに圓型ビームの枠入れをなしてゐるところがある。

坑內の出水量は內地の炭礦に比して一般に極めて少なく、生氣嶺、安州、沙里院、咸北等の各礦のやうに比較的深い坑內では毎分二〇―五〇立方呎に及ぶものがあるが、普通三―五立方呎(分)で、雨期に於ても常時出水量の二―五倍に增加する程度である。尙排水に使用してゐる喞筒は動力の關係上大部分スペシアル、ウオシントン、エバンス等の蒸氣喞筒で、電氣設備を有してゐる咸興、會寧、安州、沙里院、永安の各礦では小型のタービン喞筒を用ひてゐる。

通氣は全部自然通氣で、扇風機を用ひてゐるところは安州炭礦の一礦あるのみである。又坑內爆發瓦斯も今日迄のところでは全く發生しないため全部アセチリン燈を使用してゐる。

運搬は切羽に於ては、安州及永安炭礦等にてコンベヤーを使つてゐる外は全部橇又は朝鮮獨特の「チゲ」又は橇によつて運搬してゐる。尤も生氣嶺、永安、咸興の各礦で「樋流し」によつて片磐まで流してゐるところもある。又坑內の軌條は一二封度、坑外は大部分一二―一六封度で、手押か、牛又は馬によつて運搬してゐる。又小規模の炭礦では今尙線路を布設することなく、道路を牛車によつて搬出してゐるところもある。

多い。而して坑口から積出驛までの距離は近いところは一粁内外、最も遠いところで朱南炭礦の四〇粁があるが、大部分は五粁内外である。捲揚機は喞筒同様蒸氣力によつてゐるが、前記の如き電氣動力を有してゐるところでは電氣捲揚機を使用してゐる。尙有煙炭礦には堅坑が無いため全部水平坑道の外はコース捲である。

選炭は安州、沙里院の兩礦がジンマー・スクリーン及フイルフレイ・テーブルの水洗機を使用し遊仙炭礦で簡單な機械篩を用ひてゐる外、篩別、選別とも手選によつてゐる。而して篩目は四分乃至六分で、之による塊粉の比率は大略八對二の平均となつてゐる。

動力は安州、沙里院の兩礦が自家發電をなして居り、會寧、咸興の兩礦が買電をなしてゐる外、他はランカツシヤー又はコルニッシュ等の汽罐を据附け直接、蒸氣動力によつて捲機、喞筒を運轉してゐる。而し生氣嶺、鳳山、阿吾地及會寧地方の各礦は早晩電力を使用するに至るものと推測せられ、現に會寧地方では已に會寧電氣會社が新に發電所を建設中であるから近く附近炭礦は電化するものと見られる。

六、各炭礦の稼行概況

最近の各有煙炭礦の稼行概況を示せば次の通りである。尙諸機械軌條等の大さは呎、吋、坑内出水量は立方呎(分)を用ひ、其他は大部分米突法を採用してゐる。

會寧炭礦　鳳城炭礦株式會社

稼行鑛區　登錄第一六一四號、面積四二六、八七七坪

鑛區位置　咸鏡北道會寧郡八乙面

沿革　大正三年中野卯之助登錄許可をうけ小規模の採炭をしてゐたのを同七年現鑛業權者之を買收し稼行を續けてゐたが、同九年朝鮮採炭株式會社を創立し同十二年鳳城炭礦株式會社に合併したものである。

地理　本鑛區は會寧邑の東北約一・九粁、金生洞沙河谷右岸の斜面を占むる地域で、會寧驛より約一・六粁、此の間道路平坦、交通便である。

炭層　炭層の基盤は花崗岩で、主なる炭層は本層及下層の二層である、現在稼行してゐるは本層のみで基盤岩の隆起した區域に當つてゐるため炭層は大部分薄く〇・七—一・〇米で内二枚乃至三枚の夾みがあり、炭層の一般走向は北六〇度東、傾斜東南一五度内外を示してゐる。

採炭　當礦は今日迄各所に多くの斜坑を開坑し殘柱式により採炭したが、目下新斜坑からのみ出炭してゐる。而して該斜坑は昭和六年鑛區の端の露頭部分から傾斜二五度で開坑したもので、現在約一〇〇米を掘進してゐる。採炭法は前進式昇拂の長壁法である。

排水　ウオシントン喞筒徑六吋、十二吋の二臺あるのみである。

運搬　切羽運搬はチゲで、坑内炭車〇・五噸、軌條は一二封度、捲揚機は坑口に一〇吋の蒸氣捲が据付けられてゐる。坑外は牛噸入牛車で、會寧邑及同驛構内に運搬してゐる。

動力　コルニッシュ罐五呎×二〇呎、竪罐六呎×一二呎の二基がある。

產額　最近七ケ年の販賣高は次の様である。(單位瓲—以下同様)

昭和元年	同二年	同三年	同四年	同五年	同六年	同七年
二六、四五五	二五、六三八	二五、九六八	二三、〇一八	一七、〇〇八	一五、七九二	九、〇五〇

鑛夫 昭和七年末の在籍鑛夫人員は次の通りである。

採炭夫	支柱夫	運搬夫	機械夫	工作夫	雑夫	合計
三三	二	一一	四	二	八	六〇

遊仙炭礦 岩村長市 外二

稼行鑛區 登錄第五三八五號、面積六一〇、四〇三坪

鑛區位置 咸鏡北道會寧郡雲頭面

沿革 本鑛區は大正八年白木原作次郎氏他一名が許可を得、其後鑛業權者に二三の變更があつたが、昭和四年表記の鑛業權者に移轉したもので、もと本鑛區では有專炭礦と稱し稼行した事があつたが幾何もなくして中止し、昭和四年八月遊仙炭礦と改名して新に開坑し今日に及んでゐる。

地理 本鑛區は會寧驛より分岐する炭礦線鷄林驛の東平地一帶を占める地域で、北東は豆滿江に臨み西南は咸北炭礦鑛區に隣接してゐる。

炭層 基盤は花崗岩で第三紀層の上部には砂礫及表土の第四紀層が之を被覆してゐる。主要炭層は第一層、第三層及第四層の四層で、共に一・五―二・五米の厚さがあり、第一層は全く夾みなく、第三層及第四層は薄い二―三枚の夾みが夾在してゐる。尙第二層は〇・一―〇・三米の薄層で採掘に堪へない。炭層の一般走向は稍南北で、傾斜は東約一〇度である。

採炭 昭和四年九月咸北炭礦鑛區との境界に近く約二七米深さの竪坑を開坑し採炭してゐたが、其の後斷層の關係で之を中止し、昭和五年八月第一坑と、昭和六年三月第二坑を竪坑採炭區域の南に開坑し第一層及第三層を殘柱式にて採炭してゐる。尙坑道掘進には足尾式鑿岩機二臺、及コール・ピック二臺を使用してゐる。

排水 炭礦は比較的坑内出水量が多い。エバンス一六吋一臺、一二吋二臺、一〇吋四臺、八吋二臺の蒸氣喞筒がある。

運搬 坑内炭車は〇・六噸、軌條は一二封度で、第一坑、第三坑には一六吋及一四吋の蒸氣捲揚機が据付けられ、各鷄林驛構内貯炭場迄約三〇〇米の運炭棧橋がある。尙選炭場に於ける篩別に簡單な機械篩を用ひてゐる。

動力 汽罐はランカツシヤー七呎×三〇呎、七呎×二九呎、六呎一〇吋×二九呎九吋の三基を設備してゐる。

產額 最近三ケ年の販賣高は次の通りである。

昭和元年	同二年	同三年	同四年	同五年	同六年	同七年
―	―	―	―	八、八九四	一九、二一一	三一、三五四

鑛夫 昭和七年末鑛夫人員左の通りである。

採炭夫	後山夫	支柱夫	運搬夫	選炭夫	機械夫	工作夫	雑夫	合計
三三五	二五〇	三三	七三	四四	三八	二	五五	八一八

咸北炭礦 朝鮮合同炭礦株式會社

稼行鑛區 登錄第一三七三號、面積五八六、六四〇坪

鑛區位置 咸鏡北道會寧郡雲頭面

沿革 本鑛區は明治四十三年古賀吉三郎氏出願し、大正二年秋重德太郎氏之を讓り受け小規模の露頭採炭をしてゐたが、其後淸會線開通し且歐洲大戰勃發の爲内地方面の需要が增加したので會社組織をなし鷄林炭礦株式會社と命

名逐年坑内外の設備を擴張した。次に大正十四年北陸の樋瓜讓太郎氏との共同經營に移り、翌十五年石川縣七尾北洋商船株式會社と合併し、北鮮炭礦汽船株式會社と改め礦名を鷄林炭礦として營業して居たが、更に昭和三年十月現鑛業權者之を買收して咸北炭礦と改めたのである。

地理 本鑛區は會寧邑の西南約一二粁、豆滿江の流域に在つて、前記炭礦線の終點新鷄林驛から一・八粁で達する。

炭層 基盤は主に花崗岩であつて玄武岩が所々に露出してゐる。炭層は上部より順次に上層、第一層、第二層、第三層、第四層、第五層があるが、現在稼行してゐるのは第一層、第三層及第四層の三層で厚さは一・二—二・五米である。尙他の上層及第一層は採掘に堪へない程度の薄い炭層である。炭層の一般走向は第一坑、第三坑附近では北二〇—四〇度西、傾斜東一六度であるが、第二坑附近では走向約六〇度西、傾斜南一四度である。

採炭 採掘區域は第一、第二及第三斜坑があるが、第一坑は殆採掘跡であるが、新に第三層中に掘進し目下採炭準備中である。第二坑は鑛區の西端にあつて頗る發展し本卸（傾斜一二度）の延長は已に約九〇〇米に達して目下斷層(坑口から約六〇〇米に大きい走向斷層がある)先の各層を採炭してゐる。又第三坑は第一坑と第二坑の中間に開坑したものであるが、本卸(傾斜二四度)の延長約四〇〇米で四層中に片盤坑道を掘進中である。當礦は從來殘柱式によつて採炭してゐたが、今後退却式昇搬の長壁法を採用する豫定であると言ふ。此の外鑛區の東端鷄林驛の近くに旭坑があるが、目下休止してゐる。

排水 坑内出水量は第一坑は極めて少く、第二坑は每分一〇立方呎、第三坑每分二〇呎位で、排水には一四吋エバンス二臺、一二吋エバンス二臺、一〇吋エバンス一臺、一〇吋スペシアル一臺、八吋スペシアル一臺の蒸氣喞筒を使用してゐる。

運搬 坑内の運搬には〇・五廼炭車を使用し、片磐は軌條一二封度の手押しで、本卸には一六封度の軌條を用ひてゐる。捲揚機は第一坑、第二坑、第三坑各々八吋、一二吋、一二吋の蒸氣捲揚機を据付けてゐる。尙外に二坑外に坑木運搬用の八吋捲がある。坑外は山元から新鷄林驛構内積込貯炭場迄約一・八粁複線手押軌條を敷設してゐる。軌條は一六封度で炭車は一廼車である。

動力 汽罐はランカッシャー七呎×二八呎八吋、七呎×二八呎、六呎五吋×二八呎八吋の三基がある。尙社宅點燈用に七・五キロワットアワーの發電裝置がある。

産額 最近七ケ年の販賣高左の通りである。

昭和元年	二三、三〇八
同　二年	一九、七六一
同　三年	一九、七一九
同　四年	四〇、八六四
同　五年	五七、六七三
同　六年	九七、三四八
同　七年	七五、六二一

鑛夫 昭和七年末鑛夫人員左の通りである。

採炭夫	六六九
支柱夫	七〇
運搬夫	八〇
選炭夫	九五
積込夫	二五
機械夫	四七
試錐夫	二五
雜夫	八〇
合計	一〇八七

鳳儀炭礦 朝鮮合同炭礦株式會社

稼行鑛區　登錄第三三四號、面積四四八、九四二坪

鑛區位置　咸鏡北道會寧郡鳳儀面

沿革 本礦は明治四十一年初めて財滿精三氏に許可せられたるもので、大正八年から斤先堀をなしてゐたが、同十一年米田實氏移轉し、次で昭和五年大森宅二氏之を買收し、更に同八年六月より現鑛業權者の經營する所となつたものである。

地理 積出驛たる鳳儀驛は會寧驛基點より九・一粁で、炭礦は同驛の南、甫乙川を溯ること五・六粁にある。

炭層 基盤は花崗岩で本礦西部の山丘を形狀し、夾炭層は之に沿ふて存在してゐるが、炭層は稀に見る厚き一層で、斷層、基盤の凹凸其他の變化により非常に膨縮された所もあるけれども一般に六―七米の厚さを有し、中に一枚乃至二枚の夾みにより二層乃至三層に分かたれてゐる。炭層の一般走向は略南北で、傾斜は地表に近き部分は東二〇度、深部は一五度内外である。

採炭 從來當礦は北から南に炭層の走向に約七〇〇米の長い水平坑を掘進して卸の方向にも約六〇米迄採掘しつゝあつたが、已に其大半は拂退却をなし、現在では坑口に近い北の部分を採掘する目的で昭和四年該坑口に近い西南の位置に第一坑を開坑し已に約八五〇米を延長してゐるが、更に其北に同六年第二坑を開坑、已に約三〇〇米を掘進してゐる。而して兩坑とも斜坑で目下の主要坑である。尙採炭法は殘柱式であるが炭層が厚い爲二段にとつてゐる。

排水 常時の排水量は極めて少く每分二―三立方呎内外で、一二吋エバンス、一〇吋スペシアル各一臺、八吋スペシアル六吋ウオシントン各二臺の喞筒がある。

運搬 坑内炭車は〇・五噸車、軌條は一二封度で、一坑一二吋、二坑一〇吋の蒸氣捲揚機にて捲揚げてゐる。坑外は〇・九噸車、軌條は一二封度で、山元から鳳儀驛迄約五・六粁の手押軌道を布設してゐる。

動力 七呎×三〇呎ランカッシャー汽罐二基を設置してゐる。

產額 最近七ケ年の販賣高は次の樣である。

昭和元年	同 二年	同 三年	同 四年	同 五年	同 六年	同 七年
一三、四二八	一九、七五二	二四、二六六	二五、六九〇	二〇、九九六	一九、一五一	二〇、四五一

鑛夫 昭和七年末鑛夫人員次の通りである。

採炭夫	掘進夫	支柱夫	運搬夫	選炭夫	積込夫	機械夫	雜夫	合計
一九〇	三一	二五	四〇	三五	五	三	二六	三七四

竹浦炭礦 植森濟吉

稼行鑛區 登錄第三、二七〇號、面積二三〇、八三〇坪

鑛區位置 咸鏡北道會寧郡花豐面

沿革 本鑛區は大正六年現鑛業權者が登錄許可を得たのであるが、開坑に着手したのは同十年で當時小規模の採掘を續けてゐたが、漸次發展して今日に及んでゐる。

地理 本鑛は會寧邑の東北約五・五粁にあつて、北方花豐炭礦と隣接してゐる。交通は附近炭礦に比し少しく不便で、金生驛から山元迄の距離は六粁强である。

炭層 殆ど鑛區の全部は第三紀層で覆はれ、僅に竹浦川に沿ふて第四紀層がある。基盤は花崗岩で、當礦の主要な炭層は二層あるが、目下稼行してゐるのは下層で、厚さは一―一・八米、三―四枚の薄き夾みが介在してゐる。炭層の一般走向は大體北五〇―七〇度東で、局部的に二―三〇度に變化してゐるが平均東南一三度内外である。

採炭 大正十年第二坑を北東の方向に掘進し採掘してゐたが、昭和二年第二坑と約一五米の無直差を以て第三坑を開鑿し、更に同六年第二坑の西南六〇〇米の個所に大體前者程度の垂直差を有する第四坑を開鑿してゐるが、目下主として第三坑から出炭してゐる。而して第三坑は約六〇〇米の岩石を掘進して着炭したので今日では已に卸の延長約一五〇―三〇〇米に達してゐるため、切羽の運炭に困難である。しかし第四坑が已に着炭し第三坑の採炭場に掘進してゐるので此困難は緩和される譯である。尙第四坑は約一二〇米にて上層に着炭し、約一四〇米で下層に着炭してゐる。採炭法は殘柱式で今日迄殆ど炭柱拂をやつてゐない。

排水 卿に手押唧筒を使用してゐるのみで湧水量もまだ極めて少ない。

運搬 坑内軌條は一二封度で、山元から金生驛まで約五・五粁に一二封度手押軌道を布設し一廸炭車で運搬してゐる。會寧邑には金生貯炭場から牛車によつてゐる。

産額 最近七ヶ年の販賣高は左の通りである。

昭和元年	同二年	同三年	同四年	同五年	同六年	同七年
二、九五〇	二、〇〇〇	六、三九七	八、七六九	六、七二四	六、二二三	六、六八六

鑛夫 昭和七年末在籍人員は左の通りである。

採炭夫	坑內運搬夫	坑外運搬夫	雜夫	合計
五五	七	一九	二	八三

西倉炭礦 渡邊絶

稼行鑛區 登錄第八四五號、面積五一、五九二坪

鑛區位置 咸鏡北道會寧郡八乙面

沿革 本鑛區は明治四十四年金濟德氏許可を受け、大正八年金衡桂氏に、同十五年渡邊憲重氏に、昭和四年現鑛業權者に順次移轉したものである。

地理 本鑛は會寧邑の北三・五粁、會寧炭鑛の西北約〇・九六粁の丘陵地に開坑してゐる。

炭層 地質炭層とも會寧炭鑛と殆んど同じであるが、上層は薄く、目下稼行してゐるは下層で一・三―一・五米であるが中に薄き二―三枚の夾みがある。

採炭 従來數箇所に開坑したが目下鑛區の北端の澤に西から東向に水平坑道を開鑿し之によつて採掘してゐるけれども坑內はあまり發達してゐない。

運搬 販路は大部分會寧邑で、山元から會寧迄は牛車によつて運搬してゐる。

産額 最近七箇年の販賣高は次の樣である。

昭和元年	同二年	同三年	同四年	同五年	同六年	同七年
二七七	一八〇	六四七	一、五二四	—	四〇〇	三〇〇

鑛夫 昭和七年末鑛夫人員左の通りである。

採炭夫	運搬夫	選炭夫	合計
一八	四	一	二三

弓心炭礦 米村勝市

稼行鑛區 登錄第五七六一號、面積四二四、四四六坪

鑛區位置 咸鏡北道會寧郡花豐面

沿革 大正五年植竹龍三郎氏が登錄し、同九年現鑛業權者に讓渡したものであるが、漸く昭和七年に至りて稼行に着手してゐる。

地理 本鑛は會寧邑の北約九粁、弓心洞にあつて、金生驛から東北約六粁で山元に達する。金生驛、山元間は平坦で約四・五粁である。

炭層 炭層の基盤は花崗岩で、主要なる炭層上、下、二層のうち目下稼行してゐるのは下層のみである。炭層の厚さは一―一・二米で、炭層の一般走向は北四〇度東、傾斜は一三度內外であるが階段狀の斷層が發達してゐる。

採炭 新斜坑を山の背から畑に向つて北西の方向に掘鑿して約一〇米にて着炭、約六〇米を掘進し殘柱式にて採

炭してゐる。

運搬 坑内はチゲによつて坑外に搬出してゐるが、坑口から金生驛迄牛車運搬をなしてゐる。

産額 昭和七年度に於ける販賣高は一、〇三八瓲である。

鑛夫 坑内外で二〇人内外である。

青鶴炭礦 迫間劦太郎

稼行鑛區 登錄第五〇六號、面積八二七、七〇〇坪

鑛區位置 咸鏡北道慶興郡慶興面

沿革 本鑛區は明治四十二年末現鑛業權者鑛業權を得、大正十三年林岩太郎氏との間に斤先掘契約をなして今日に及んでゐる。

地理 本鑛區は慶興面青鶴洞の部落から北東約三粁の地にあつて、京圖線は本鑛區の中央を横斷して居る。尙青鶴驛は雄基驛起點四三粁である。

炭層 花崗岩及黑雲母片岩等の結晶片岩が基盤をなしてゐるが、第三紀層の存在する區域は線路を夾んで約一〇〇米間に各々一萬坪乃至二萬坪の小さい範圍で三箇所東西に配列してゐる。各々北西端は斷層で階段的に上つてゐて、全部此斷層を底邊として不規則な矩形、楕圓形乃至三角形をなし、炭層の走向はほゞ他の邊に沿ふて走り底邊の方に傾斜してゐるが大體一般の傾斜はほゞ西に一〇度と見るべきである。炭層は一層で、露頭近くでは一米(薄き夾み二枚)内外であるが、中心部にては五―六米(夾みなし)の厚さに發達してゐる。

採炭 前記區域の東部は殆ど採炭濟みにて目下中央(線路の北側)の區域を採炭してゐる。當區域も各所に姑息的に採炭してゐたが、昭和六年四月線路附近から水平坑道(一三〇米にて着炭)を開鑿し主として之により今日迄採掘しつゝあるが、更に本八年九月水平坑々口から北東約二〇〇米のところに北三〇度東の方向に傾斜二〇度にて斜坑を開鑿し水平坑道の採掘區域に連絡し、深部の採掘をなす爲に目下捲揚機の据附中である。尙爽炭區域の西部(線路の南側)には昭和四年頃四個所の斜坑にて採掘したことがあるが目下中止してゐる。採炭法は不規則な殘柱式である。

排水 平時の出水量は極て少ないが、雨期は相當多量となる。喞筒は七・五吋のウォシントン一臺を使用してゐる。

運搬 新斜坑に一〇吋の蒸氣捲機を据付けてゐる。坑口から青鶴驛まで三・五粁間に一二封度の手押軌道を布設し之によつて運搬してゐる。

動力 目下四呎×八呎の豎型汽罐一基を使用してゐるが、更に五呎×二四呎のコルニッシュ汽罐一基を布設中である。

産額 最近七箇年の販賣高は次の通りである。

昭和元年	同 二年	同 三年	同 四年	同 五年	同 六年	同 七年
三〇〇	三〇〇	六〇〇	三、五六五	六、一八七	六、四二九	七、〇〇三

鑛夫 昭和七年末鑛夫人員は左の通りである。

採炭夫	後山夫	排水夫	運搬夫	雜夫	合計
三二	四四	二六	四〇	八	一五〇

阿吾地炭礦 荒井初太郎

稼行鑛區 登錄第六二六五號、面積一、〇〇〇、〇〇〇坪(龍淵洞坑)、登錄第六二六四號、面積六一四、〇〇〇坪(梧鳳洞坑)

鑛區位置 咸鏡北道慶源郡有德面、慶興郡上下面

沿革 本炭田は遠く明治四十一年頃地方農民により發見せられたと傳へられる。大正十年現鑛業權者が許可をうけ麻生晉波氏の手によりて試掘をなしてゐたが、昭和四年四月現鑛業權者が正式に採掘に着手したものである。因に同七年朝鮮窒素肥料株式會社に讓渡してゐるが、未だ登錄してゐない。

地理 本炭田は慶興、慶源の二郡に跨り豆滿江の支流阿吾地川の流域を占める準圓形の地域で、東西五粁、南北八粁の大炭田である。而して前記稼行鑛區外に未稼行鑛區一二鑛區ありて總面積六萬坪を超えてゐる。倚京圖線阿吾地驛(雄基起點五一・二粁)は本鑛區の東端に設置されてある。

炭層 本地域の基盤は第三紀層以前の古い水成岩と花崗岩からなり、周圍の山を形成しその盆地に第三紀層が沈澱してゐる。地層の走向は周圍の基盤に添つて不規則なる楕圓形をなし傾斜はほゞ盆地の中心に向つてゐる樣で五―二五度である。炭層は總督府で施行した金剛石試錐によれば一・四米(内〇・二米の夾み一枚)及二―二・五米(内合計〇・五米の夾み二枚)の二層と外に約九米(内純炭部五米内外)の下層がある。

採炭 現在採掘してゐる所は同炭田の北中央部龍淵洞の北側山麓にある龍淵洞坑と、其北西端梧鳳洞の丘陵地にある梧鳳洞坑の二箇所で、前者は〇・八―一米、後者は二―二・四米の厚さを有し共に水平坑道で殘柱式により採炭してゐる。倘當礦は目下斜坑を開鑿して相當增産をなす計劃中である。

運搬 坑内の運搬には一二封度の軌條、〇・四噸(梧鳳洞坑)及〇・五噸(龍淵洞坑)の炭車を使用してゐるが、坑外運搬には龍淵洞坑に阿吾地驛積込場まで約三粁に二五封度の手押軌道を敷設し〇・六噸の鐵製炭車を使用してゐる。又龍淵洞、梧鳳洞の兩坑間約六・九粁は現在牛車によつてゐるが目下手押軌道の敷設中である。

動力 未だ全く動力を使用してゐないが、目下炭礦附近に同會社の發電所を建設中であるから近く電氣動力によりて斜坑捲をなす豫定と言ふことである。

產額 最近の產額は左の通りである。

昭和元年	同二年	同三年	同四年	同五年	同六年	同七年
—	—	—	七〇六	三、八五五	四、二四〇	三、九六六

鑛夫 昭和七年末鑛夫人員左の通りである。

採炭夫	後山夫	選炭夫	運搬夫	雜夫	合計
一五	一五	六	一八	六	六〇

古乾原炭礦　麻生晉波

稼行鑛區　登錄第三二九三號、面積八四二、五一六坪

鑛區位置　咸鏡北道慶源郡龍德面、東原面

沿革 大正六年高場願一氏許可をうけ、同七年麻生晉波氏に、昭和三年大藪博治氏に、同八年四月再び麻生晉波氏に順次鑛業權の移轉をなしてゐる。

地理 圖們線新乾驛(雄基起點七五・六粁)の西約一二粁、龍北洞部落の北丘陵地にある。

炭層 炭層は花崗岩を基盤としてゐる第三紀層に夾在してゐる。元來古乾原炭田の當地域附近に於ける一般の炭層の走向はほゞ南北で傾斜西であるが、目下採掘してゐる區域附近は基盤の起伏に影響されて西傾斜より東傾斜に彎曲し且全體として北(約一〇度)に傾斜してゐる。炭層の厚さは一・五―二米で、全く夾みを有してゐない。石炭は良質の部に屬する。

採炭 當礦はもと古乾原部落の西で採掘をしてゐたことがあるが、當區域は昨七年に着手したので、龍北洞と林治洞部落の中間の丘陵地に該水平坑道を北に向つて掘進し約二〇米にて着炭採炭をなしてゐたが、其後その附近から

西に向つて斜坑(二五度の傾斜)を開鑿し目下之により出炭してゐる。採炭法は殘柱式である。尚最近當礦附近に新に斜坑を開坑し、採炭に着手する計劃中である。

排水 坑内の喞筒は六吋及三吋ウォシントン二臺を設備してゐる。

運搬 斜坑の捲揚機は七吋汽筩徑のもので、坑口から新乾驛までは龍北洞から五龍川に沿ふて約一二粁に一二封度の軌道を布設し牛によりて運搬してゐる。此間に使用してゐる炭車は一・二瓲で牛一匹に三臺の炭車を連結してゐる。

動力 コルニッシュ汽罐四呎×一二呎のも一臺を据附けてゐる。

產額 當礦は前記の如く昭和五年六七九瓲、同六年六五〇瓲を古乾原の西から出炭し同七年に當地域から四八〇瓲を採掘販賣してゐる。

鑛夫 昭和七年末鑛夫人夫人員は左の通りである。

採炭夫	支柱夫	選炭夫	機械夫	運搬夫	工作夫	雜夫	合計
三〇	二	四	六	一七	六	二	六七

訓戎炭礦 渡邊精吉郎 外一名

稼行鑛區 登錄第六三三九號、面積三八四、七〇〇坪

鑛區位置 咸鏡北道穩城郡訓戎面、慶源郡慶源面

沿革 大正十年現鑛業權者及伊澤、山本、羽瀨の四氏許可をうけたるが、同十三年羽瀨氏、昭和七年山本氏各脫退して今日に及んでゐる。

地理 京圖線訓戎驛及下面驛の中間、訓戎・慶源道路より西に約三〇〇米入りたる沙禾洞部落附近の丘陵地にあつて、訓戎から距離約三粁である。

炭層 訓戎炭田の一般走向は北東、傾斜東であるが、當地域は殆ど北五〇度東の走向となり北傾斜(一〇度―一五度)をなしてゐる。炭層は舊坑にては炭層の厚さは約一・五米に上つてゐるけれども上下に粗惡炭ありて實際に商品となるのは〇・八以内である。然るに目下採掘してゐる新坑内では一・七米乃至二米あつて、此内下盤側に〇・三米の粗惡炭があり、舊坑にて採掘してゐた石炭より良質である。當炭礦は他と同じく大部分花崗岩である。

採炭 昭和五年八月沙禾洞部落東の丘陵地に走向の方向に水平坑道を開坑し最近まで同坑にて採炭してゐたので、巳に該水平坑道は一三〇米、卸に三〇米を掘進してゐるが、炭層に夾みが多いために之を休止し、本八年五月右坑口から丘陵を隔てた西の丘陵麓(舊坑の西約三〇〇米)に新坑を開鑿して目下之のみによつて採炭してゐる。同坑は澤の地並から右丘陵に向つて北西の方向に炭層の傾斜(一〇―一五度)に沿ふて掘進してゐるが、目下卸片磐とも三〇米内外進んでゐるのみである。

排水 手押喞筒にて排水してゐるが、出水量は尙一立方呎(分)以下である

運搬 現在坑内はチゲ運搬で、坑口から訓戎驛までは牛車によつてゐる。

產額 產額は昭和五年からで、同年一、二六五瓲、同六年一、〇〇二瓲、同七年一、九五二瓲である。

鑛夫 昭和七年末在籍人員は左の通りである。

採炭夫	後山夫	支柱夫	雜夫	合計
九	九	二	四	二四

浦辻炭礦 浦辻東策

稼行鑛區 登錄第一九四號、面積三一五、一三九坪

鑛區位置　咸鏡北道鏡城郡羅南面邑

沿革　明治四十一年櫻井藤吉氏本鑛區の鑛業權を得、次で同四十四年現鑛業權者之を買取し爾來探炭を繼續して、今日に及んでゐる。

地理　本鑛區は羅南邑の西南端生駒町の終點にあつて附近は緩かなる丘陵地をなし、國道も本區域の一部を通じ羅南驛迄約一・二八粁交通至便である。羅南炭礦と南接し羅南を隨一の供給地域としてゐる。

炭層　羅南炭田は羅南邑を中心とせる盆地に沈積した三紀層で、基盤花崗岩は周圍の丘陵を形成してゐる。炭層は咸北炭田の各炭層と異り上部の層位にある。此の内主なる炭層は二層で、上層は一・五－三米で、中に薄き夾があり、下層は約一・五米で夾はない。現在稼行してゐるのは上層であるが、當礦に於ける一般走向は北一〇度東、傾斜は東二七度内外である。

採炭　最初鑛區の北端廣德山の西麓及南端羅南炭礦の境界に近き區域を探炭したが廢坑となり、現在は其の中間の蒸風呂(もとの採炭跡にて自然發火せる跡)の附近に斜坑を開始して之によつて出炭してゐる。該斜坑は三二度の傾斜地で略北向に三〇米掘進して着炭し、之より僞傾斜に卸及目貫を掘進してゐる。採炭法は殘柱式であるが、殆ど炭柱拂をなさず掘進のみである。尙坑口には一・五馬力のブロアーが据附けられてゐる。

排水　坑内出水は毎分三立方呎で七・五馬力の電氣タービン喞筒を設備してゐる。尙其の外手押喞筒五臺を使用してゐる。

運搬　坑内よりチゲにて坑外に搬出し、坑口にて牛車に積込み羅南市内に送つてゐる。

動力　永安工場より電力の供給を受けてゐる。

產額　最近七ヶ年の販賣高は次の樣である。

昭和元年	同二年	同三年	同四年	同五年	同六年	同七年
四,〇四〇	三七七〇	五,三八五	六,七〇四	五,四八六	四,一三三	二,七三三

鑛夫　昭和七年末鑛夫人員次の通りである。

採炭夫	支柱夫	運搬夫	雜夫	合計
一五	二	三〇	七	五四

羅南炭礦　安永英次

稼行鑛區　第八六九六號、面積二〇三、七八三坪

鑛區位置　咸鏡北道鏡城郡羅南邑

沿革　明治四十三年採掘許可を得て姑息なる採掘をなし、次で大正七年飯田繁藏氏之を買收して探炭をなしてゐるが、露天掘跡から自然發火をなしたため大正十三年坑内に水を溜めて採掘を中止したことがある。其後昭和六年十月現鑛業權者の經營する所となつて今日に及んでゐる。

地理　本鑛區は羅南邑生駒町及奬吉町を包含する地域で、淸津には鐵路二十粁にて達し、又兩地間の道路は約一六粁平坦で自動車、牛馬車の往來頻繁で交通頗る便利である。

炭層　基盤は花崗岩で、主なる層は上層及下層の二層である。而して上層は厚さ三・五米で薄き二枚の夾を有し、下層に厚さ一・八米で殆ど夾みを介在してゐない。現在稼行してゐるのは上層で、岩層の走向は南北、傾斜は北東一八度乃至二〇度である。

採炭　本坑(斜坑)一坑のみで殘柱式によつて採炭してゐるが、最近の開坑で坑内はあまり發達してゐない。而して本卸は傾斜三七度で目下約一〇〇米掘進してゐる。

排水 坑内出水量は常時毎分一立方呎に過ぎない。排水には五馬力の電氣タービン喞筒を使用してゐる。

運搬 坑内未だ發展してゐないのでチゲによつてゐるが、坑外は牛車運搬で羅南市内に搬出してゐる。

動力 永安工場より電力の供給を受けてゐるが使用高は極めて少ない。

産額 最近の販賣高は昭和六年一二一瓲、同七年一、六〇五瓲である。

鑛夫 昭和七年末鑛夫人員は左の通りである。

採炭夫	後山夫	雜夫	合計
四	一〇	四	一八

生氣嶺炭礦

生氣嶺粘土石炭株式會社

稼行鑛區 登錄第七〇號、面積三九六、四七〇坪、登錄第一六二七號、面積八六、一二二坪

鑛區位置 咸鏡北道鏡城郡朱乙溫面

沿革 明治四十年末鋸月龍太郎氏韓國政府より許可を受け同四十一年開坑に着手し採鑛の傍ら軍隊(羅南)及一般の需要に應じて居たが、大正五年更に同礦附近にある高嶺土が經濟的價値があるを認め石炭粘土を併せ採掘する爲現社長西脇濟三郎氏と共同經營をなし、更に大正六年株式組織に變更、同五年隣接鑛區を買收し今日に及んでゐる。

地理 本炭田は生氣嶺部落から朱乙驛近くに至る線路及國道に沿ふ細長き區域で梧村面及朱乙溫面の兩面に跨つてゐる。當礦から鏡城驛に北約四・八粁、羅南邑に北九・六粁、清津に北東四〇粁であるが昭和二年末新設した生氣嶺驛には僅々〇・八粁である。

炭層 本炭田の東及西は略南北に走る花崗岩の丘陵があつて第三紀層及第四紀層は此の間の盆地に成層し西部の山麓に沿ふて露頭が連續してゐる。主要炭層は上部から三尺層、上層、下層及五尺層の四層であるが各層とも所によつて變化多く發達の狀態が一樣でない。而して現在採掘してゐる坑内で見れば第二坑は上層發達してゐないため主として三尺層及下層を採掘し、第三坑では三尺層、上層、下層の三層を採掘してゐる。而して各層の厚さは平均三尺層一米、上層一・五米、下層一・八米である。尙最下部層の五尺層は以前採掘してゐた。本坑(第一坑)では一・五米内外であつたけれども第二、第三坑區では極めて局部的に發達して第三坑の一部で採掘するに止つてゐる。炭層の一般走向は北一〇度東、一般傾斜は東四〇度―四五度である。

採炭 本鑛區の北部の第一坑は昭和二年初採炭終了廢坑となり、目下その南にある第二坑及第三坑を主なる採炭場としてゐる。これ等の各本卸及連卸は共に十二尺層に沿ふて僅傾斜で開鑿したので現在本卸の延長は第二坑五八〇米、第三坑六〇〇米、傾斜は何れも二五度である。採炭法は殘柱式であるが兩坑とも坑内大に發展し互に連絡してゐる。

排水 坑内出水量は二坑毎分三〇立方呎、三坑毎分一二立方呎で、排水には一六吋エバンス四臺、一二吋同型五臺、六吋ウオシントン二臺の蒸氣喞筒を使用してゐる。尙一二吋エバンス四臺、一〇吋ウオシントン一臺、一〇吋シンキングポンプ一臺の豫備がある。

運搬 炭層傾斜が急であるため切羽運搬は昇向採炭にては鐵樋を設置して石炭の自重で運搬坑道迄落下するが、三坑南部の如く二五度内外の場合又は卸を採炭する場合は橇又は麻袋にて運搬する。炭車は坑内外共に〇・五噸車で、坑外運搬は生氣嶺驛迄〇・八粁間に一二封度復線軌道を布設し運搬してゐる。捲揚機は蒸氣捲揚機二臺、三坑共一二吋捲機が使用され、尙坑外硬塊用に八吋捲機がある。尙外に二〇吋の捲機一臺の豫備がある。

動力 動力は蒸氣で、點燈用のみに小型發電機を設置してゐる。汽罐は七呎×三〇呎ランカッシャー四基、五呎×二四呎コルニッシュ、二基で發電機は五キロワットの直流發電機である。

産額 最近七ケ年の販賣高は次の樣である。

昭和元年	同 二年	同 三年	同 四年	同 五年	同 六年	同 七年
三三、六二八	三四、一九四	四五、七七二	五〇、七六四	四九、〇六〇	四〇、〇〇四	三六、一一三

鑛夫 昭和七年末鑛夫人員次の樣である。

坑夫	支柱夫	運搬夫	機械夫	工作夫	選炭夫	合計
二五二	四二	五七	三七	二	二六	四一六

朱乙野田炭礦　野田清定

稼行鑛區　登錄第六〇八一號、面積八六、六八〇坪

鑛區位置　咸鏡北道鏡城郡朱乙溫面

沿革 明治三十九年發見したもので、大正九年水戸部一三郎氏出願許可を得たのを現鑛業權者が大正十一年讓受けて同時に露頭部の採掘をなしてゐたが、大正十五年一時休山してゐる。然るに咸鏡線の開通に伴つて販路が擴張したので昭和五年から再び採掘に着手して今日に及んでゐる。

地理 本鑛區は城津淸津間の道路に沿ひ之に平行せる南北長方形の鑛區で、その南端は約二・二粁にて朱乙驛に達する。生氣嶺は鑛區の北端より約一粁で、羅南へは約七・二粁で自動車の便がある。

炭層 基磐は花崗岩で、十數層の炭層があるが、採掘に堪えるものは五尺層及三尺層の二層で、共に膨き夾みがある。目下稼行してゐるのは五尺層のみで、炭層の一般走向は殆ね南北、傾斜は東四〇度內外である。

採炭 傾斜六〇度の斜坑を開鑿して殘柱式に類似せる方法で採炭してゐる。斜坑の延長は目下二〇米に過ぎない。

排水 徑二吋の手押喞筒四臺がある。

運搬 坑內は全部チゲで、坑外は朱乙驛及羅南に牛車運搬をなしてゐる。

產額 最近三ケ年の販賣高は次の樣である

昭和元年	同 二年	同 三年	同 四年	同 五年	同 六年	同 七年
—	—	—	—	五〇四	二、〇六三	一、九八〇

鑛夫 昭和七年末鑛夫人員次の樣である。

採炭夫	後山夫	支柱夫	選炭夫	合計
一〇	二五	二	二	三九

龍峴炭礦　後藤連平

稼行鑛區　第八三〇三號、面積六八〇、三七〇坪

鑛區位置　咸鏡北道鏡城郡朱乙溫面

沿革 本礦は現鑛業權者が昭和六年五月許可を得、同年七月稼行に着手してゐる。

地理 本礦は咸鏡線龍峴驛西北の平野を占むる一帶で、東方は海岸に面し他の三方は丘陵に圍まれてゐる。

炭層 基磐は花崗岩で、炭層は三層あるが、現在稼行してゐるのは第一層のみで他はまだ探鑛されてない。而して第一層は五—六米の厚さを有し、走向北四度西、傾斜東一五度である。

採炭 坑口は本坑（斜坑一坑のみで本卸の平均傾斜一六度）の延長は已に三〇〇米に及んでゐる。目下片磐坑道の掘進によつて出炭してゐるが、採炭法は殘柱式である。

排水 目下の出水量は比較的多く每分四〇立方呎に上つてゐる。排水には六吋ウオシントン喞筒二臺、六吋エバンス一臺を有してゐる。

運搬 坑内炭車は〇・七噸車で、一二封度軌條を布設し、坑口には一〇吋蒸氣捲が据付けられてゐる。坑外は龍峴驛積込場迄約一粁、一二封度手押軌道を布設し牛車運搬をなしてゐる。

動力 汽罐はランカッシャー六呎×二四呎一基、コルニッシュ五呎×一五呎二基がある。

產額 昭和七年の販賣高は八、三六八噸である。

夫鑛 昭和七年末に於ける鑛夫人員左の通りである。

採炭夫	後山夫	支柱夫	運搬夫	選炭夫	機械夫	工作夫	雜夫	合計
三五	三五	八	七	二五	二八	七	六	一五一

朱南炭礦 土井卯三郎 外三

稼行鑛區 登錄第四五七五號、面積五八一、三三九坪

鑛區位置 咸鏡北道鏡城郡朱南面

沿革 大正七年中川森助、藤田長吉、土井卯三郎三氏採掘許可を得、更に昭和二年高田松之助氏之に加入し今日に及んでゐる。

地理 本區域は咸鏡線會文驛を距る西方約一六粁、朱南面三鄕洞陶店部落附近にあるが、交通不便のため今日迄あまり發展し得ないのである。

炭層 基盤は花崗岩にて鑛區の深部には玄武岩が被覆してゐる。稼行しうる炭層は上層(三尺層)、中層(四尺層)及下層の三層で、上層及中層平均一・二米(薄き夾み二―三枚)、下層平均六米で下層の上部及中部には薄き夾み二枚あるのみの純炭部なるが、下部は薄き三―五枚の夾みを有し炭質も幾分劣つてゐる。炭層の走向は約北四五度東、傾斜南に約二八―三〇度である。

採炭 大正十一年發見後露頭附近に水平坑道を開鑿し約九〇米にて上層に、一三七米で中層に、一八二米で下層に着炭後該坑道から上部を右片盤にて約五〇〇米掘進してゐる。尙採炭は殘柱式である。

產額 最近七箇年の販賣高は左の左りである。

昭和元年	同 二年	同 三年	同 四年	同 五年	同 六年	同 七年
三八九	三三五	四二五	七一五	一、〇七〇	一、七〇三	一、一九八

鑛夫 昭和七年末在籍人員は全部にて一七人である。

永安炭礦 朝鮮窒素肥料株式會社

稼行鑛區 登錄第五六七號、面積積二三五、四五三坪、登錄第六二六一號、面積二三一、四六二坪

鑛區位置 咸鏡北道明川郡西面

沿革 大正八年麻生音波氏鑛業權を得て昭和三年開鑿に着手したが、同年現鑛業權者之を買收して採鑛に努め、山元・極洞驛間の運炭線を敷設し運炭能力の增進を計り、次で昭和六年永安乾餾工場が新設されてから諸般の設備を擴張して今日の出炭を見るに至つたのである。

地理 咸鏡線永安驛から北西の谷を入つた三鄕洞貧風附近にある地域で、山元から永安驛までは六・四粁である。

炭層 當礦の附近は殆んど四紀層にて被はれ、北東部に玄武岩があつて僅かに谷に沿つて三紀層の露出がある。炭層は花崗岩の基盤に沿つて僅に露出してをり試錐の結果によると六層あるが、連續性あるもの少なく、現在稼行してゐるのは第三層及第五層の二層で何れも二米から六米に及んでゐる。

採炭 第一坑(本卸傾斜一八度、掘進延長一七米)、第二坑(本卸傾斜二〇度、延長五〇〇米)、第三坑(本卸傾斜二〇度、延長四〇〇米)、第四坑(本卸傾斜一八度)の四斜坑があるが、此内第一坑は目下採炭を中止し、第四坑は掘

進中で、主要坑は第二及第三坑である。採炭には後退式片盤拂長壁法を採用し機械掘をなしてゐる。採炭に手持電氣鑿岩機を採用してゐるが、目下泉式一・五馬力一臺、昭和式〇・七五馬力一六臺と外に、昭和式三・五馬力ヘッデング・マシン一臺がある。尙坑内に局部扇風機(三・三馬力)六臺を運轉してゐる。

排水 現在坑内出水量は每分第一坑約一立方呎、第二坑八立方呎、第三坑二立方呎で喞筒は五馬力ピストン式一臺、四〇馬力タービン式一臺、一五馬力タービン式四臺、五馬力タービン式一臺を使用してゐる。尙タービン式四〇馬力二臺、一五馬力五臺、五馬力二臺、一馬力三臺及ピストン式五馬力五臺の豫備がある。

運搬 切羽運搬に吊樋式コンベヤー(電動機五馬力三臺ある)を採用し坑内炭車は〇・八噸鐵製炭車を使用してゐる。軌條は片盤一二封度、本卸一八封度で、捲揚機は第二坑口七五馬力、第三坑口三〇馬力、第四坑口三〇馬力の電氣コース捲である。坑外は山元、永安工場及驛構内間約二・四粁、復線軌條往路二五封度、歸路一八封度を敷設し、木製二噸炭車にて運搬してゐる。

動力 永安工場より電力の供給を受けてゐる。

産額 最近五ケ年の出炭量は次の通りである。

昭和元年	同 二年	同 三年	同 四年	同 五年	同 六年	同 七年
—	—	一,四〇三	七,九〇一	九,三七六	一四,七三一	四六,九八〇

鑛夫 昭和七年末鑛夫人員左の通りである。

採炭夫	後山夫	支柱夫	運搬夫	選炭夫	機械夫	軌道夫	充塡夫	試錐夫	雜夫	合計
一〇五	一〇五	四一	四三	二九	二九	一三	四〇	八	六一	四七五

和炭礦　小林徳一郎

稼行鑛區　登錄第一八二三號、面積三二八、九六七粁

鑛區位置　咸鏡北道明川郡下雩面、上雩面

沿革 本鑛區は大正四年安泰允氏外二名に許可されたのを同七年現鑛業權者に移轉し、昭和三年に始めて稼行に着手したものである。

地理 本礦は咸鏡線の東側雩紐川に沿ふた山腹にあつて、昭和四年六月新設した上龍田驛の南約〇・八粁にある。而して明川驛には南約三・五粁、龍洞驛に北約四粁の距離である。

炭層 基盤は花崗岩で第三紀層の上部には玄武岩が被覆してゐる所が多い。稼行してゐる炭層は一層で、坑内に於て見れば四米乃至四・五米に達し夾みは少ない。炭層の走向は約北一〇度東、傾斜東三〇度内外である。

採炭 坑口は第一坑(本卸傾斜二四度、掘進延長三五〇米)及第二坑(本卸傾斜三〇度延長三五〇米)の二坑で第一坑は昭和三年開坑し、其北に第二坑を同六年開坑したものである。尙採炭は殘柱式を採用してゐる。

排水 目下の出水量は第一坑每分一〇立方呎、第二坑每分二〇立方呎で、一四吋ウオシントン喞筒三臺、一〇吋同型一臺を使用してゐる。

運搬 坑内炭車は〇・七噸で、軌條は一二封度であるが、各斜坑本卸は二〇封度軌條で、各坑口には一〇吋の蒸氣捲揚機が据付けられてゐる。坑外は選炭後自轉捲にて捲下し、上龍田驛積込場迄約四五〇米間に二封度の復線軌條を布設して手押運搬をなしてゐる。

動力 汽罐はランカッシアー式七呎×三〇呎一基、竪型四呎二吋×九呎三吋一基、クロステューブ式五呎×一二呎二基がある。

産額 最近五ケ年の販賣高は左の通りである。

昭和元年	同二年	同三年	同四年	同五年	同六年	同七年
—	—	四五〇	一三、六〇三	二九、〇六八	三五、二一六	二八、三三八

鑛夫 昭和七年末鑛夫人員は左の通りである。

採炭夫	掘進夫	支柱夫	運搬夫	選炭夫	機械夫	工作夫	積込夫	雜夫	合計
三九	三〇	一七	一三	四	一四	六	一六	二	一四〇

古站炭礦 内外鑛業株式會社

稼行鑛區 登錄第五七九一號、面積九二三、一六六坪、同第五七九五號、九九五、九五八坪、同第五七九六號、九八六、一三二號

鑛區位置 咸鏡北道明川郡阿澗面

沿革 大正七年出口雄三氏許可を得たのを同九年現鑛業權者之を讓受けたもので、開坑に着手したのは昭和二年末である。

地理 咸鏡線古站驛から東南約四・八粁、同驛から漁佃洞に通ずる道路の北東側の第三紀層を包含する地域である。

炭層 當區域の含炭層は第三紀層の上部累層に屬するもので主なる炭層は六層である。此内第二層を除き他の五層は〇・三—一・二米で夾みがあるが、第二層は萬戸洞の本層と稱して一・五—三米に達し中に數條の夾みがある。時に中央に一・五米内外の砂岩及炭質頁岩の大なる夾みによつて上下二層に分離されることがある。炭層の走向は略南北で、傾斜は東に一〇度内外である。

採炭 坑口は事務所の東側の萬戸洞の兩側に開坑したる本坑（本層上部）、南坑（本層上部）、中切坑（本層下部）と、事務所西側の谷にあるノメコラン坑（第五層）及在任坑（第四層）で全部水平坑道であるが、目下採炭してゐるは中切坑のみで本層の下部層を採炭してゐる。中切坑道は本層走向に沿ふて南より北に向つて約六四〇米を掘進し、カラシキ採炭をなしてゐる。

運搬 坑内は〇・七噸車、一二封度軌條を布設し、坑外は坑口附近に自轉捲によりて選炭場に送り選炭後一・二噸車にて、古站驛積込場迄約四・八粁牛車運搬をなしてゐる。軌條は單線一二封度である。

産額 最近四ヶ年の販賣高は左の通りである。

昭和元年	同二年	同三年	同四年	同五年	同六年	同七年
—	—	三〇三四	六、七七一	五、〇〇九	五、〇九二	四三四五

鑛夫 昭和七年末鑛夫人員は左の樣である。

採炭夫	支柱夫	選炭夫	運搬夫	保線夫	雜夫	合計
二五	一	四	九	二	四	四五

院坪炭礦 吉松三郎 外一

稼業鑛區 登錄第八五五七號、面積五一、〇〇〇坪

鑛區位置 咸鏡北道吉州郡德山面城津郡鶴西面

沿革 大正六年登錄第三七二一號鑛區として森下茂雄、芳川寛治兩氏許可を得、同九年齊藤ヤエの名義となり、同十四年から稼行に着手してゐたが、昭和五年九月に至り遂に之を廢礦してゐる。しかし其の後昭和六年五月現鑛業權者が同鑛區を復活許可をうけ同七年から引續き採掘をなしてゐる。

地理 咸鏡線院坪驛から臨溟川の支流に沿へる道路を北西に上ること約三粁强にて達する。城津及吉州の兩郡の

境界は本鑛區を横斷してゐる。

炭層 當區域は花崗岩の凹部に沈澱した極めて狹少な炭田區域で、傾斜に直角な斷層によつて遮斷せられてゐる。炭層の一般走向は北二〇度東、傾斜は東に五度乃至一〇度であるが、露頭部分では二〇―三〇度の急傾斜をなしてゐる。稼行しうる炭層は二層で下層は一・八米(中に薄き夾みあり)と此上部に約二米を距てゝ三・八―四・二米の厚い本層がある。此本層は中に〇・二―〇・三米厚さの一枚乃至二枚の夾みがあるが、之によつて分たれた上部及中部は比較的炭質よく下部は幾分劣つてゐる。

採炭 大正十四年より昭和三年頃迄露頭部分を殘柱式にて採炭し次で露天掘をなしてゐたのである。然るに現鑛業權者になつてから之より低い位置から水平坑道を北に向つて開鑿したが、一一四米にて下層に、一三〇米にて上層に着炭したので目下本層の坑道より上部の區域を殘柱式によつて採炭してゐる。

運搬 水平坑道に一二封度の軌條を布設し、坑口から院坪驛まで約三粁餘を牛車によつて運搬してゐる。

產額 最近七箇年の販賣高は左の通りである。

昭和元年	同二年	同三年	同四年	同五年	同六年	同七年
一、七七九	四、五九二	二、五四一	二、一五一	—	二七七	九六

鑛夫 昭和七年末在籍人員は採炭夫一九人、支柱二人、合計二一人である。

咸興炭礦

鑛業權者 朝鮮合同炭礦株式會社

鑛區 登錄第七八六八號、面積九三四、八五四坪

鑛區位置 咸鏡南道新興郡加平面

沿革 本礦は明治四十四年神林啓太郎氏外四名が許可を得共同經營となつたが、翌十五年咸興、西湖津の輕便鐵

道を兼營する咸興炭礦株式會社を創立して石炭の採掘をなしたことがある。然るに大正五年山本唯三郎氏之を讓受け次で同十年鈴木商店の經營に屬する帝國炭業株式會社と合併し、更に昭和四年朝鮮炭業株式會社に、同六年大蘇宅二氏に、同八年六月に現鑛業權者に順次移轉したものである。

地理 咸興府の北方約二七・二粁にあつて、朝鮮鐵道咸南線長豐驛は炭礦所在地に建設されてゐる。

炭層 本鑛區の東部は城津江の流域に沿ふ平地で、他の三周は全部花崗岩及片麻岩の丘陵に圍まれ之に沿ふて夾炭層の露頭が僅かに露出してゐるが、盆地は殆んど四紀層にて被覆されてゐる。主要なる炭層は上層(二・四米)中層一・八米、下層(一・二米)の三層であるが、現在稼行してゐるのは上層一層のみである。各炭層の厚さ、夾みの狀態及各層間の距離等は一定してゐないが、大體上中層間は約三・五米の砂岩、中下層間は一・二―一・五米の頁岩で各層とも薄き夾みがある。而して炭層の一般走向は略北六〇度東、傾斜二五度―三〇度である。

採炭 當礦は從來鑛區の西南部にて多くの斜坑を開鑿し殘柱式により採炭してゐたが、昭和七年一月新第一坑を昭和七年新第二坑を前記舊坑の東部に開坑し目下主として此二坑に於て前進式昇排の長壁法により採炭してゐる。而して第一坑の本卸は傾斜三〇度、延長二五〇米、第二坑本卸は傾斜二五度、延長二八〇米で、倘片磐坑道掘進中である。

排水 坑内出水量多く排水には全部タービン喞筒で、一〇〇馬力一臺、五〇馬力二臺、二五馬力二臺を使用してゐる。

運搬 切羽運搬には鐵樋を設置して石炭の自重により運搬坑道に落下せしめ〇・六噸炭車に直積する。坑内軌條は片磐一二封度、本卸一八封度で、第一坑口に一〇〇馬力、第二坑口に五〇馬力の電氣コース捲を据付けてゐる。坑外は汽車積込場近き故選炭後直に積込棧橋により貨車に積込み汽車運搬をなしてゐる。

動力 朝鮮窒素肥株式會社より電力の供給を受けてゐる。

産額 最近七箇年の販賣高は左の通りである。

昭和元年	同二年	同三年	同四年	同五年	同六年	同七年
六九、五〇二	六五、一五八	六三、六二一	四九、六九八	四三、七五四	二〇、八五五	三一、九八九

鑛夫 昭和七年末鑛夫人員は左の通りである。

採炭夫	掘進夫	支柱夫	運搬夫	選炭夫	機械夫	積込夫	充塡夫	雜夫	合計
一九四	一三〇	四〇	一二五	一三〇	三五	一五	四〇	四四	六四三

通川炭礦 東洋拓殖株式會社

稼行鑛區 登錄第五六八四號、面積八九六、一六二坪

鑛區位置 江原道通川郡順嶺面

沿革 當炭田の發見は遠く明治四十年頃で、同四十一年魚菜が許可を得製鹽用燃料として四、五年間採掘したが休止し大正三年鑛業權を放棄してゐる。その後大正八年高山主計氏外一名の名義にて許可をうけ、同九年から採炭を開始し爾來引續き操業されてゐたが、昭和五年三月現鑛業權者の手に移り今日に及んでゐる。

地理 朝鄭東海岸航路の寄港である庫底港の西方約四粁に在りて、最近元山から高城迄東海岸鐵道が布設されたので陸送に便となつたのである。

炭層 附近の基盤は花崗岩及花崗片麻岩で、三紀層及四紀層が此上に成層し到る處玄武岩及その岩屑が被覆してゐるが、本區域内には僅かに花崗岩の露出があり、東南部に玄武岩が噴出してゐるのを見る。炭層は厚さ及走向、傾斜共頗る變化が多いが、大體第一層(八尺層)、第二層(本坑層)及第三層(水平層)の主要炭層があり、共に發達した部分もあつたやうであるが、目下採掘してゐる所では第一層は三米内外の内上盤及下盤に近い部分の一―一・五米は石炭及硬が互層してゐるので採掘しうる部分は中央の〇・四米内外である。而してこの上部に薄き白色の粘土がある。他の層は之を採掘した炭内が廢坑となつてゐるので其狀態を審にすることが出來ないが、大體第二層〇・八―一・五米で夾み多く、第三層は〇・六―一米内外のやうである。而して一般走向は略東西、傾斜北平均一〇度である。尙坑内では花崗岩の起伏が多いので所々に炭層の消滅してゐる部分がある。

採炭 今日迄開坑したものは凡て水平坑で、本坑、八尺坑、第一坑、第二坑等數坑あるが、目下採掘してゐるのは第一坑のみである。該坑は八尺坑坑口から約一二米低い位置から八尺坑採炭區域の下部に向つてほゞ北西の方向に開鑿されたもので、約四〇〇米で着炭し、二千坪の區域を採掘してゐる。因に採炭法は殘柱式である。

排水 常時二―五立方呎(分)の出水があるが、動力がないので手押喞筒によつてゐる。

運搬 坑内は一二封度の軌條で、坑外は選炭場から自轉捲にて捲卸し、これより庫底海岸迄一二封度手押軌道にて運搬する。而して船積するものは同港棧橋にて貯積し、陸送するものは庫底驛迄牛車により運搬する。

産額 最近七箇年の販賣高は左表の通りである。

昭和元年	同二年	同三年	同四年	同五年	同六年	同七年
七、八五二	五、〇九四	六、八四四	八、一三五	四、一二四	六、〇九六	三、四七九

鑛夫 昭和七年末在籍人員は左の通りである。

採炭夫	後山夫	選炭夫	運搬夫	雜夫	合計
二〇	八	二	四	五	三九

金剛山炭礦 新谷新七

稼行鑛區　登錄第五五〇五號、面積四五一、八〇〇坪

鑛區位置　江原道通川郡順嶺面

沿革　大正八年六月現鑛業權者許可をうけ、昭和六年から稼行に着手し今日に及んでゐる。

地理　東海北部線庫底驛（元山起點七〇粁）より北西約一粁、線路に沿へる北側の獨立山南麓にありて、庫底港は東約一・七粁である。

炭層　線路に沿へる本地域の西側には花崗岩の基盤露出し、北西に玄武岩があり、東一帶は平地である。炭層の走向はほゞ南北、傾斜東約七—八度で、基盤に近い西部及北部は一—一・五米（薄き夾み二枚ある時あり又は夾み消滅する時がある）であるが、深部にては殆ど夾みを有せない二・四—六米の厚層となつてゐる。外に右層から二米下部に一米（内薄い夾み一枚）の中層、更に〇・六—〇・九米隔て〇・七米（内薄い夾み二枚）の下層がある。但此内中層は質幾分劣つてゐるので主として目下上層のみを稼行してゐる。尙東部には走向斷層により東に落込んでゐるが斷層北には從來の石炭に比し良質の炭層があると言ふことである。

採炭　昭和六年五月線路の北から北西の方向に水平坑道を開鑿し約一五〇米で着炭之より昇りに四〇米内外、片盤に一〇〇米内外殘柱式により掘進しつゝあるのであるが、本八年六月より右水平坑道により南の線路に近い部分から斜坑二本を開鑿中で目下汽罐及捲揚機を設備中である。

運搬　坑内は一二封度の軌條を布設してゐるが、坑外は庫底港及庫底驛（約二粁）まで牛車によつて運搬してゐる。

産額　昭和六年三一〇噸、同七年一、一一三噸である。

鑛夫　昭和七年末在籍人員は採炭夫二四人、支柱夫二人、合計二六人である。

鳳山炭礦　鳳城炭礦株式會社

稼行鑛區　登錄第四五三七號、面積九九〇、一六三坪

鑛區位置　黃海道鳳山郡洞仙面、文井面

沿革　本鑛區は大正七年建部露三郎氏外二名が許可を受けたのを同年加藤爲三郎氏が買收し、翌八年から探鑛的採炭に着手し漸次出炭增加に伴ひ諸般の設備を擴張したが、同十一年磐城採炭株式會社と合併翌十二年には更に會寧炭礦も合併し社名を鳳城炭礦株式會社と改稱し今日に及んでゐる。

地理　當礦は載寧平野の東端に位し低丘の地帶で積込驛である京義線新鳳山驛からの距離は、本礦は西南約一・六粁、新七礦及末廣礦は約〇・八粁の近距離である。尙沙里院には北約四粁で交通便である。

炭層　基盤は石灰岩で、稼行してゐるものは上より順次新七坑層、鳳層、本層、下層で、新七礦層は〇・四—〇・五米、鳳層は一米内外、本層は一米より七米で特に東南部で、厚き層をなしてゐる。下層は當礦附近ではあまり發達してゐないで、沙里院炭礦々區近くにて約二米になつてゐる。而して此等の層は皆數枚の夾みを有してゐる。尙末廣坑では〇・三米の炭層を採炭してゐるが、恐らく新七坑層の下部に存在するものと思はる。炭層の走向は本坑方面では約北六〇度東、新七坑方面では北三〇度東を示し、傾斜は大體北又は西で、本坑方面では三〇度、新七坑方面では約一五度である。

採炭　主要なる坑口は本坑（第一坑とも謂ふ）、新七坑、末廣坑の三斜坑で此内本坑は主として下層及部分的に上層及本層を殘柱式により採炭してゐる。又新七坑は目下採炭を中止してゐるが、末廣坑は前進式片磐拂の長壁法によつて採炭してゐる。尙本坑に近く西部に新一坑を掘進中である。

排水　排水量比較的多く喞筒はエバンス一八吋一臺、一四吋一臺、一二吋一臺、スペシアル一〇吋一臺を使用し

てゐる。

運搬 坑内は軌條一二封度、炭車は〇・五廸車である。捲揚機は新一坑徑一〇吋、本坑徑一二吋、新七坑徑一二吋、末廣坑徑一二吋の蒸氣捲を据付けてゐる。尚本坑々外に徑八吋の送炭捲がある。坑外は本坑方面は新鳳山驛迄約一・六粁、新七坑、末廣坑方面より約〇・八粁の間に一六封度の軌條を敷設して牛車運搬をなしてゐる。炭車は一・二五廸容量のものである。

動力 汽罐は本坑方面にてコルニッシュ五呎×一九呎八吋四分の一、一臺。ランカッシャー六呎×二四呎四吋、七呎×二九呎、六呎一吋四分の一×二四呎八吋各一臺あり、新七坑、末廣坑方面ではコルニッシュ五呎×一九呎四吋四分の一、一臺、ランカッシャー六呎一一吋四分の一×二八呎一〇吋四分の三、六呎×二四呎六吋各々一臺宛据附けてゐる。

產額 最近七箇年の販賣高は次の樣である。

昭和元年	同二年	同三年	同四年	同五年	同六年	同七年
七七、七四一	八二、四七五	八〇、二〇四	七六、九一七	六七、六二二	五八、三五五	四一、六六二

鑛夫 昭和七年末鑛夫人員左の通りである。

採炭夫	掘進夫	支柱夫	運搬夫	機械夫	積込夫	試錐夫	雜夫	合計
六二八	四八	五二	七一	三九	二〇	一五	五二	九二五

沙里院炭礦 明治鑛業株式會社

稼行鑛區 登錄第二八〇三號、面積八五四、一五〇坪

鑛區位置 黃海道鳳山郡洞仙面文井面

沿革 現鑛業權者が大正三年六月買收したもので、昭和五年十一月第一坑を掘進し、第二坑は同七年二月第三坑は同年十月開坑したものである。

地理 當礦は鳳山炭礦に隣接して載寧平野の東端に位し低丘の地帶で積込驛京義線新鳳山驛迄一・七粁、沙里院邑に約四粁で交通運搬共に便である。

炭層 鳳山炭礦の本層(鳳山層)の下部にある下層(沙里院層)が當礦附近にて發達し約二米となり主として之を稼行してゐる。外に右の鳳山層も鑛區一帶に於て發達してゐる。一般の走向は東西に近く傾斜北二〇度內外である。

採炭 主要なる坑は第一、第二及第三の三斜坑で、第一、第二坑では沙里院層(上、下二層あり)のうち下層のみを採炭中であるが、第三坑では鳳山層(厚四尺)を採鑛の目的で目下掘進中である。採炭には三〇米毎に左右片磐坑道を掘進して延長を三六〇米限度として後退式充塡片磐拂の長壁法によるのと、方一八米の炭柱に割り「ストール」式に炭柱採掘をなし上層を崩落して採取する方法をとつてゐる。尚拂跡は硬充塡をなしてゐるが、採炭にはボーラー ピックハンマー四臺を使用してゐる。

排水 坑內出水量は第一坑毎分一七立方呎で第二及第三坑は少なく共〇・五立方呎內外である。一六吋スペシアル一臺、八吋同型一臺、一四吋シンプレックス一臺、六吋ウォシントン二臺、及八馬力デートン唧筒二臺がある。

運搬 切羽運搬には鐵樋を設置して石炭の自重により運搬坑道に落下せしめて〇・五噸の炭車に直積する。軌條は片磐一二封度、本卸二〇封度で斜坑捲は一坑口一二吋、二坑口八吋、三坑口六吋の蒸氣捲である。坑外は山元より新鳳山驛積込場迄約一・七粁、二〇封度軌條を布設して牛車運搬をなしてゐる。

動力 自家發電所を有し四〇キロワット三相交流發電機一臺あるが、尚一〇〇キロワット容量のものを設備中である。この外蒸氣力を使用し、ランカッシャー七呎×二八呎七吋四分の一、七呎×二八呎八吋二分の一、七呎×三〇

呎七呎×二七呎一一吋の大さの汽罐各一基宛設備され發電用及一坑二坑の捲揚用としてゐる。尚第三坑口には別に直立水管式汽罐四呎五吋×八呎一〇吋一臺があり捲揚機用としてゐる。

産額 最近の販賣高は昭和五年一四四瓲、同六年二、〇〇九瓲、同七年一五、八一九瓲に漸次増加してゐる。

鑛夫 昭和七年末の鑛夫人員は左の通りである。

採炭夫	支柱夫	選炭夫	運搬夫	機械夫	工作夫	電工夫	雜夫	合計
八三	二五	六一	三	三四	二	四	五八	二六八

安州炭礦　明治鑛業株式會社

稼行鑛區　登錄第七五七號、面積九六四、五九〇坪

鑛區位置　平安南道安州郡立石面

沿革 本炭田は明治四十三年頃松井民二郎氏許可を受け、同四十四年開坑に着手したのであるが、大正元年現鑛業權者之を買收して安州炭礦と命名し漸次設備を擴張して今日に及んでゐる。

地理 本鑛區は京義線萬城驛から西約一一・二粁、新安州驛から南西約二六粁で、各驛に至る道路は比較的平坦である。附近一帶は平野で西方は海岸に近い。

炭層 本鑛區の第三紀層は中生代水成岩及花崗片麻岩上に成層し、北部には玄武岩が噴出してゐる。主要炭層は東部は一層〇・九米、二層〇・七米、三層一・二米内外であるが、西部は上層二・四米、下層二米内外になつてゐる。而して目下第三坑にて稼行してゐるのは下層のみであるが、斜坑本卸から東部は炭層の中央の夾みが薄いため約二米高さを維持してゐるが、本卸から西部は西に行くに從ひ漸次夾みの厚さ大となり各〇・九米内外の上、下二層に分離されその間隔〇・六―四・五米に及んでゐる。炭層の一般走向は北五〇度西、傾斜南一四度である。

採炭 鑛區中央の第一、第二坑は採炭終了し其東部を第三坑、同じく西部を第四坑として採掘してゐたが、昭和四年三月第四坑を中止し目下第三坑のみに集中してゐる。本卸は傾斜二〇度、延長已に一、九〇〇米に達してゐるが前記の如く約〇・九米宛に分かたれてゐるので、まづ下層のみに就て二曲片又は三曲片を一採炭區域と定めて最下部の曲片を最初に一一米幅で走向に掘進して中硬を切り落し、肩深に硬充塡を行ひ坑道の進行と共に前進式階段昇向長壁法によつて曲片より直接採掘をなし、各一二・六米の間隔に昇坑道を作つて其の天井切上げ硬で拂跡を充塡し、三六米上方に進んだ時に上部曲片を拂跡に作り昇作業を續けて順次上部に及んで行く。上層は下層採掘終了後に奧部から後退式にて採掘することにしてゐる。採炭にはシーメンスE四二三電動オーガードリル二臺を使用してゐる。尚第三坑、人道坑口にシロッコ式三萬立方呎の扇風機を設置して機械通風をなし、倘切羽通氣には局部扇風機三臺を使用してゐる。

排水 坑内出水量比較的多く每分約五〇立方呎にして排水には電氣タービン喞筒八〇馬力四臺、三〇馬力一臺、デートン喞筒五馬力二臺を使用してゐる。

運搬 坑内軌條は片磅一二封度、〇・四瓲炭車を使用し、坑口に五十馬力の蒸氣捲揚機が据付けられてゐる。坑外は山元より萬城驛積込貯炭場迄約一二・八粁を二〇封度軌條を敷設して馬車運搬をなしてゐる。

動力 自家用發電所を有し二五〇キロワットの三相交流發電機二臺があるが、又蒸氣力も併用してゐる。此等に要する汽罐はバブコック・エンド・ウイルコック式（傳熱面積一〇九八平方呎）三基（發電用）及多管式（五呎×一四呎六吋）三基である。

産額 最近七ケ年の販賣高左の通りである。

昭和元年	同二年	同三年	同四年	同五年	同六年	同七年
六四、一七二	四二、九九五	五二、八四九	六二、六八五	六〇、八九七	五五、六八七	六六、三〇二

鑛夫 昭和七年末鑛夫人員左の通りである。

採炭夫	支柱夫	運搬夫	機械夫	工作夫	電工夫	選炭夫	雜夫	合計
一四九	四五	三一	三一	三七	二	四〇	一三三	四六九

寺坂炭礦 藤木永吉

稼行鑛區 登錄第五六號、面積八八七三六〇坪

鑛區位置 慶尙北道迎日郡長鬐面、峯山面

沿革 當長鬐炭田は比較的早く世に知られ本鑛區の如きは已に明治三十八年頃より發見稼行せられた模樣である。其の後同四十年釜山岡田良一氏之を買收し、汽罐捲揚機を設置して斜坑採炭をなして居たが發展せず、遂に大正二年弘淸三氏に、同十三年更に、山口宇八郎氏に、同十五寺坂一郎氏に順次移轉したが今日まで發展しなかつた。而して昭和五年七月より現鑛業權者の經營する所となつて今日に及んでゐる。

地理 本礦は浦項・長鬐・良浦港を通ずる道路に沿ひ、長鬐の北約一粁明村にある。而して良浦港に東南二・六粁、良浦港に東北五・八粁を距て、山元・良浦間の交通は極めて便利で、且同港は海深く小規模の棧橋によつて小蒸氣船及帆船は容易に貨物の直積をなすことが出來る。

炭層 本礦の北部には粗長斑岩の露出がある。三紀層は此上に成層し、此内含炭層上部下部に分れ、此間に玄武岩質凝灰岩がある。而して兩含炭層に多くの炭層があるが、主要なるは下部含炭層の基底に近き三層で目下稼行してゐるのは四尺層のみである。炭層の一般走向は北四〇—四五度東であるが、本礦附近では殆んど東西で傾斜は北二〇內外である。尙本礦は近く東に約三五度東の方位に下り(傾斜)斷層がある。炭層の厚さは坑內では一—二米の厚さを有するが、夾みが五—八枚あつて純炭部分は少ない。炭質は二種炭に屬し且光澤が無いが、炭層の上磐に近いものは品質よく下磐に近いものは粗惡である。

採炭 往年事務所附近に數箇所の極めて淺い斜坑及竪坑を開鑿し、且其外露天掘をなしたが發展するに至らなかつた。目下水平坑道を炭層の走向に沿ふて開鑿してゐるが其延長約一〇〇米に過ぎない。採炭法も別に一定せるものなく半探礦的のものである。

運搬 坑內はチゲにより又水平坑には炭車によつて坑外に搬出してゐる。坑外は牛車で良浦港に送り汽船にて釜山其他に輸送してゐる。

產額 昭和二年以後の販賣高は次の樣である。

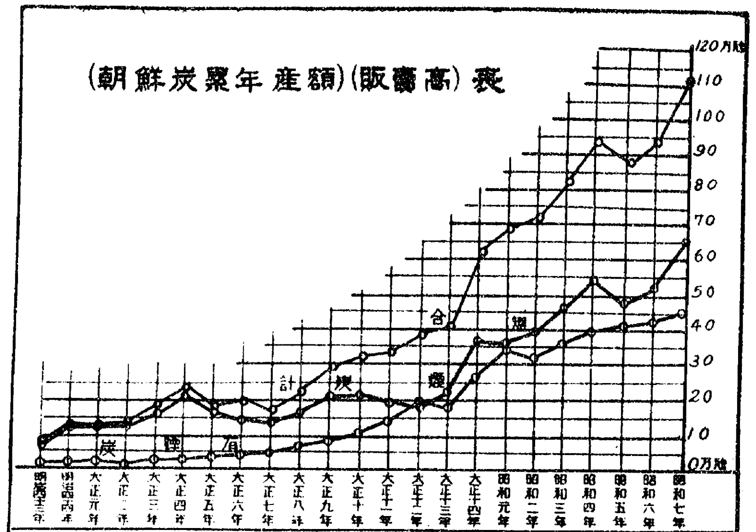
昭和元年	同二年	同三年	同四年	同五年	同六年	同七年
—	四九四	五〇〇	一、二五〇	三四九	一四九	四〇〇

鑛夫 鑛夫は坑內外で二十五人程度である。

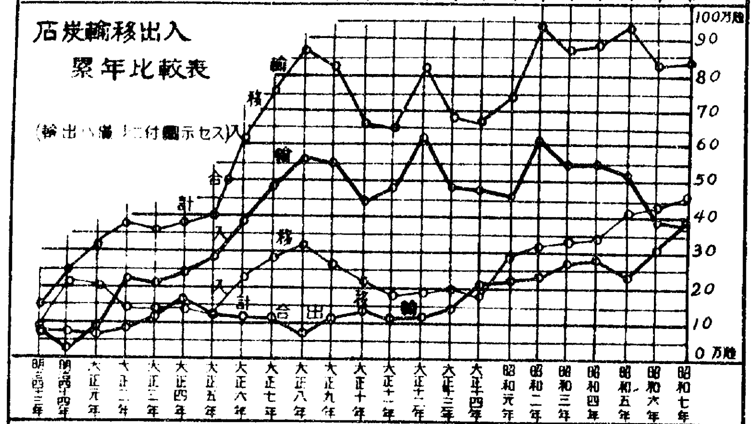
「附錄」

朝鮮に於ける石炭鑛業の趨勢

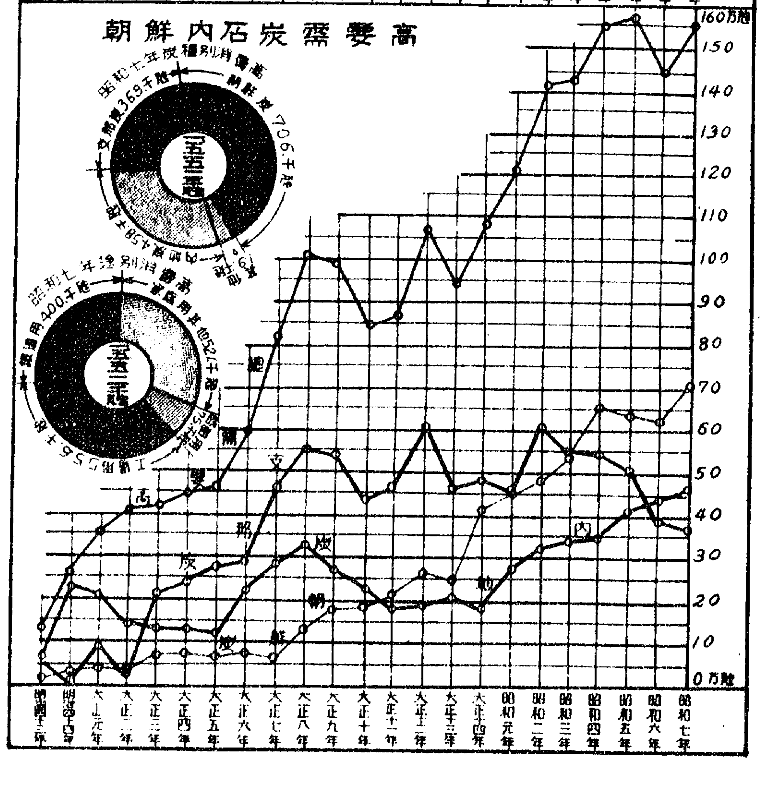
25×1



(朝鮮炭累年產額)(販賣高)表
120万噸
0万噸



石炭輸移出入
累年比較表
100万噸
0万噸



朝鮮内石炭需要高
160万噸
0万噸

附録

朝鮮に於ける石炭鑛業の趨勢

朝鮮の石炭を有煙炭及無煙炭に分割して發刊することにしたので朝鮮に於ける石炭鑛業の趨勢を總括して窺知する場合に不便が多い。故に左に一般的の統計を添附することにしたのである。

鑛區

累年石炭出願件數表

年次	件數	指數
明治四三	[illegible]	一〇〇
明治四四	[illegible]	[illegible]
大正元	[illegible]	[illegible]
大正二	[illegible]	[illegible]
大正三	[illegible]	[illegible]
大正四	[illegible]	[illegible]
大正五	[illegible]	[illegible]
大正六	一四〇	[illegible]
大正七	[illegible]	[illegible]
大正八	[illegible]	[illegible]
大正九	[illegible]	[illegible]
大正一〇	一、〇八一	[illegible]
大正一一	[illegible]	[illegible]
大正一二	八〇	[illegible]
大正一三	[illegible]	[illegible]
大正一四	[illegible]	[illegible]
昭和元	[illegible]	[illegible]
昭和二	[illegible]	[illegible]
昭和三	[illegible]	[illegible]
昭和四	[illegible]	[illegible]
昭和五	[illegible]	[illegible]
昭和六	[illegible]	[illegible]
昭和七	[illegible]	[illegible]

累年石炭鑛區數表（單位百萬坪、以下四捨五入）

年次	鑛區數 許可	鑛區數 稼行	坪數 許可	坪數 稼行
明治四四	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
大正元	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
大正二	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
大正三	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
大正四	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
大正五	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
大正六	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
大正七	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
大正八	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
大正九	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
大正一〇	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
大正一一	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
大正一二	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
大正一三	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
大正一四	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
昭和元	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
昭和二	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
昭和三	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
昭和四	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
昭和五	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
昭和六	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
昭和七	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

註　大正十一年より昭和四年までの許可坪數には平壤炭田に於ける總督府鑛區約五億二千萬坪の一鑛區包含され

昭和五年以後は殘鑛區を二億五千萬坪に減區してゐる。

昭和七年末に於ける石炭鑛區及稼行鑛區數

許可鑛區數	稼行鑛區數	稼行歩合	許可鑛區坪數	稼行坪數	稼行歩合
三五五	六八	一九%	四八三、四六五、七三七	四八、二八二、八六六	一〇%

但右鑛區のうち石炭高嶺土なる鑛種名の鑛區が一三坪(數一一一、四三、八七八坪)含まれてゐる。

昭和七年末に於ける道別鑛區數表

道別		京畿	忠北	忠南	全北	全南	慶北	慶南	黃海	平南	平北	江原	咸南	咸北	計
鑛區數	許可	二	—	二	—	一〇	二〇	一	一四	八	四	二	二	二九〇	三五五
	稼行	—	—	一	—	二	二	—	二	三	一	三	四	五〇	六八
坪數(千坪)	許可	一八三	—	一、〇八〇	—	四、三二九	一〇、六九三	三四	九、五三二	三七、〇八〇	三、三五五	八、七一五	七、八七七	三二二、五五七	四八三、四六四
	稼行	—	—	九八四	—	六五九	一、八三二	—	一、八四四	二〇、八五九	一、〇〇〇	二、二八四	三、六八一	一四、一九〇	四七、五九四

產炭高

炭種別產炭高表

炭種別	昭和六年產出高	價額	炭種別比率 產出高	炭種別比率 價額	昭和七年產出高	價額	炭種別比率 產出高	炭種別比率 價額
有煙炭	四七七、五七八瓲	三、三六六、一四四円	四五%	四七%	四五二、〇三二瓲	三、三六五、四五三円	四一%	三八%
無煙炭	五八八、八〇四	三、八二三、九三〇	五五	五三	六五二、一六二	五、七〇四、六九六	五九	六二
合計	九六六、三八二	七、一九〇、〇七四	100	100	一、一〇四、一九四	九、〇七〇、一一九	100	100

一、昭和七年に於ける道別產出高表（單位瓲）

炭種別＼道別	忠南	全南	慶北	黃海	平南	平北	江原	咸南	咸北	合計
有煙炭	—	—	四〇〇	五七、四八一	六六、三〇二	—	四、五九二	三一、九八九	二九〇、二六八	四五二、〇三二
無煙炭	二〇	二、八三五	一、一三五	—	六二九、一三八	三五	—	一八、七七九	—	六五二、一六二
合計	二〇	二、八三五	一、五三五	五七、四八一	六九五、四四〇	三五	四、五九二	五〇、七六八	二九〇、二六八	一、一〇四、一九四

二、累年產炭高表（單位瓲）

年次＼種別	有煙炭	無煙炭	合計 數量	合計 價額
明治四十三年	三一、九五五	七五、三二八	七八、四五三	三八八、七八一円
明治四十四年	四、四〇七	一二六、八七七	一三一、二〇四	五五五、四七七
大正元年	一〇、六三九	一二七、二三一	一三七、八七〇	五五七、八〇二
同二年	八、七〇四	一二九、二八五	一三七、九八九	五七〇、一五八
同三年	二八、六三六	一五四、六二六	一八三、二六二	八一〇、七五三
同四年	二四、五三三	二〇四、五九六	二二九、一二一	九九七、七六六
同五年	二八、九五四	一六一、八〇六	一九〇、七六〇	八一九、三二三

年次				
同 六 年	四一、一三七	一五四、〇〇五	一九五、一四二	一、二四九、五三五
同 七 年	四五、六三三	一四一、九九一	一八七、六二四	一、三五二、八七五
同 八 年	五七、六七〇	一六一、八八四	二一九、五五四	二、二三四、八五五
同 九 年	八八、四八五	二〇三、七〇八	二六九、〇三六	三、九七一、一五五
同 十 年	一〇五、八〇四	二〇四、七八六	三一〇、五九〇	三、一九五、二六三
同 十一 年	一三八、四八二	一七八、八四八	三一七、三三〇	二、五五一、五五六
同 十二 年	一九七、四八五	一八三、八九四	三八〇、三七九	二、七五〇、三二四
同 十三 年	一八四、二〇七	二二五、二〇九	四〇九、四一六	二、九六一、四〇七
同 十四 年	二六二、九九二	三五九、三三二	六二三、三〇四	四、五四八、五五五
昭和元年	三三一、三九五	三五一、五〇一	六八二、八九六	四、九九二、六九九
同 二 年	三一七、二五五	三九三、三三三	七一〇、五八八	五、二六八、五二八
同 三 年	三五〇、八六四	四六四、九五四	八一五、八一七	五、七六九、二六九
同 四 年	三九九、六五七	五三八、二四五	九三七、九〇二	六、五三二、四八五
同 五 年	四〇五、六八一	四七八、四七七	八八四、一五八	五、三五七、九六六
同 六 年	四一七、五七八	五一八、八〇四	九三六、三八二	五、一九〇、〇六四
同 七 年	四五二、〇三二	六五三、一六三	一、一〇四、一九四	五、九七〇、一二九

輸移出入高

累年輸移出入高（單位瓩）

年次	輸出	移出	輸移出計	輸入	移入	輸移入計	出入差
明治四三年	三、一四八	六九、六一五	七二、七六三	五七、四三〇	七二、九四七	一三〇、三七七	五七、六一四
同 四四年	二、五九一	八四、二九四	八六、八八五	一〇、三九四	二二五、〇一七	二三五、四一一	一四八、五二六
大正元年	一、八九四	八四、二四八	八六、一四二	九九、四六二	二〇六、八六八	三〇六、三三〇	二二〇、一八八
同 二 年	—	九〇、六六八	九〇、六六八	二二七、二三七	一四五、八八八	三七三、一二五	二八二、四五七
同 三 年	—	一三〇、一〇一	一三〇、一〇一	二一八、六九六	一三七、二九五	三五五、九九一	二二五、八九〇
同 四 年	—	一六四、〇六二	一六四、〇六二	二四七、九八一	一三四、六四六	三八二、六二七	二一八、五六五
同 五 年	一、六七八	一三〇、九六二	一三二、六四〇	二七七、〇四五	一二五、三三六	四〇二、三八一	二六九、七四一
同 六 年	一、九六〇	一三〇、九六三	一三二、九二三	三八七、七四九	二二九、八八一	六一七、六三〇	四八四、七〇七
同 七 年	三、五九二	一二六、七二三	一三〇、三一五	四七三、二〇六	二七七、六三四	七五〇、八四〇	六二〇、五二五
同 八 年	四、三四一	八七、八四六	九二、一八七	五五七、二二二	三二八、三〇六	八八五、五二八	七九三、三四一
同 九 年	二、二二二	一二五、四九八	一二七、七二〇	五五四、〇九〇	二六八、八〇二	八三二、八九一	七〇五、一七一
同一〇年	一、六二五	一二九、六六七	一三一、二九二	三三二、九九四	三三三、四六一	六六六、四五五	五三五、一六三
同一一年	一、九一〇	一二一、〇七七	一二二、九八七	四七七、五〇一	一八一、三七九	六五八、八八〇	五三五、八九三
同一二年	四、三〇一	一二〇、九四八	一二五、二四九	六一四、七一〇	一九七、六九九	八一二、四〇九	六八七、一六〇
同一三年	三、二三八	一四三、六二九	一四六、八六七	四八八、一五五	二〇二、二六七	六九〇、四二二	五四三、五五五

同　一四年	八、一七九	二〇四、四五二	二一二、六三一	四八五、六二九	一八七、一八九	六七三、八一八	四八〇、一八七
昭和元年	一、七七二	二二一、七八五	二二三、五五一	四六四、八四八	二七七、四三八	七四二、二八六	五一八、七五五
同　二年	九二九	二三六、九五二	二三七、八八一	六一九、三八〇	三一三、八七一	九三三、二五一	六九五、三七〇
同　三年	三、一八八	二七〇、六一四	二七三、八〇二	五五〇、一〇〇	三三二、三七三	八八二、四七三	六〇八、六七〇
同　四年	七七五	二八五、一四二	二八五、九一七	五五〇、〇三三	三四四、二六二	八九四、二九五	六〇八、三六八
同　五年	三四五	二三九、七一二	二四〇、〇五七	五二〇、六三一	四一五、〇三一	九三五、六六二	六九五、六〇五
同　六年	四七八	三一五、二一九	三一五、六九七	三九二、二五四	四三七、九五八	八三〇、二一二	五一四、五一八
同　七年	一、〇九九	三九六、七七六	三九七、八七五	三八七、八一三	四五八、四七四	八四六、二八七	四四八、四一三
昭和七年價額(圓)	八、七五七	三、八四一、三五一	三、八五〇、一〇八	三、七八八、六五八	四、〇八四、五九三	七、八七三、二五一	四、〇二三、一四三

最近五箇年種別輸移出高

年別	輸出 有煙炭	輸出 無煙炭	移出 有煙炭	移出 無煙炭	計 有煙炭	計 無煙炭	合計
昭和三年	八二四屯	二八、三二四屯	五、三九一屯	二三九、二六三屯	六、二一五屯	二六七、五八七屯	二七三、八〇二屯
同　四年	一七六	五九九	四九四	二八四、六四八	六七〇	二八五、二四七	二八五、九一七
同　五年	八一	二六四	五七一	二三九、一四一	六五二	二三九、四〇五	二四〇、〇五七
同　六年	二三二	二二六	八、四七五	三〇六、七四四	八、七〇七	三〇六、九七〇	三一五、六七七
同　七年	一、〇六五	三四	一、三〇一	三九五、四七五	二、三六六	三九五、五〇九	三九七、八七五

各港別輸出表（昭和七年）

港別	仁川 數量	仁川 價額	清津 數量	清津 價額	會寧 數量	會寧 價額	新義州 數量	新義州 價額	其他 數量	其他 價額	計 數量	計 價額
輸出(支那)	—	三五円	一屯	六円	三九屯	二、〇三三円	三五四屯	一、六六九円	七〇五屯	五、〇一四円	一、〇九九	八、七五七

各港別移出表（昭和七年）—單位右欄は（噸）左欄は（圓）—

港別	仁川	元山	清津	雄基	西湖津	釜山	麗水	鎭南浦	其他	計
東京	— / 六	— / —	— / —	— / —	— / —	— / 三五	二、三四〇 / 七、八八〇	七四、一〇五 / 六九六、六九〇	— / —	七六、四四五 / 七一四、五六九
横濱	— / —	— / —	— / —	— / —	— / —	— / —	— / —	二、八九五 / 一〇、五六五	— / —	二、八九五 / 一〇、五六五
名古屋	— / —	一、三〇〇 / 七、六〇〇	— / —	— / —	— / —	— / 三五	— / —	四三、七六三 / 三九〇、八三〇	— / —	四五、〇六三 / 三九八、四六五
四日市	— / —	— / —	— / —	— / —	— / —	— / —	— / —	三、四〇五 / 二六、三三〇	— / —	三、四〇五 / 二六、三三〇
熱田	— / —	— / —	— / —	— / —	— / —	— / —	— / —	一、一四〇 / 一一、四〇〇	— / —	一、一四〇 / 一一、四〇〇
大阪	— / —	一、六〇〇 / 一六、四〇〇	三六一 / 三、三四〇	一一 / 一〇三	一七六 / 一、八七三	— / 五五	四八三 / 三、八七四	一六八、八五三 / 一、六七一、三八八	一 / 一五	一七一、三八六 / 一、六九五、九四六
徳山	— / —	— / —	— / —	— / —	— / —	— / —	— / —	八〇、〇六〇 / 八〇〇、六〇〇	— / —	八〇、〇六〇 / 八〇〇、六〇〇
半田	— / —	— / —	— / —	— / —	— / —	— / —	— / —	二、三七四 / 二三、七四〇	— / —	二、三七四 / 二三、七四〇
直江津	— / —	— / —	— / —	— / —	— / —	— / —	— / —	四、〇一五 / 四〇、一五〇	— / —	四、〇一五 / 四〇、一五〇
伏木	— / —	— / —	— / —	— / —	— / —	— / —	— / —	一、六四七 / 一六、四七〇	— / —	一、六四七 / 一六、四七〇
舞鶴	— / —	— / —	— / —	— / —	七 / 四〇〇	— / —	— / —	五、一〇三 / 五一、〇三〇	— / —	五、一一〇 / 五一、四三〇
其他	— / —	— / —	一 / 八	二五〇 / 三、〇七〇	— / —	五九六 / 四、九六六	— / —	三七、一二一 / 三四九、九七九	九 / 八五	四三、四四六 / 三五八、四〇八
計	— / 六	二、八〇〇 / 二四、〇〇〇	三六二 / 三、三四八	二六一 / 三、一七三	一八三 / 二、二七三	五九七 / 六、〇四七	二、八二三 / 一一、七五四	三八九、六八四 / 三、七八四、六八三	一〇 / 一〇〇	三九五、四七六 / 三、八四一、三五一

各港別輸移入表（昭和七年）—單位右欄は（噸）左欄は（圓）—

入港 ＼ 炭種	外國炭 撫順	外國炭 本溪湖	外國炭 芝罘	外國炭 北樺太土威	外國炭 鴻基	外國炭 其他	外國炭 計	內地炭 九州	內地炭 大嶺宇部	內地炭 夕張	內地炭 其他	內地炭 計	總計
仁川	[illegible]	—	[illegible]	—	—	—	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
群山	[illegible]	—	—	—	—	—	[illegible]	[illegible]	—	—	—	[illegible]	[illegible]
元山	[illegible]	—	—	—	—	—	[illegible]	[illegible]	—	[illegible]	—	[illegible]	[illegible]
清津	—	—	—	—	—	—	—	[illegible]	—	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
雄基	—	—	—	—	—	—	—	[illegible]	—	—	—	[illegible]	[illegible]
西湖津	—	—	—	—	—	—	—	—	—	[illegible]	—	[illegible]	[illegible]
釜山	[illegible]	—	—	—	[illegible]	—	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	—	[illegible]	[illegible]
木浦	[illegible]	—	—	—	—	—	[illegible]	[illegible]	[illegible]	—	—	[illegible]	[illegible]
馬山	—	—	—	—	—	—	—	[illegible] / 一一一,一〇一	—	—	—	[illegible] / 一一一,一〇一	[illegible] / 一一一,一〇一
鎭海	—	—	—	—	—	—	—	[illegible]	—	—	—	[illegible]	[illegible]
麗水	—	—	—	—	—	—	—	[illegible]	—	—	—	[illegible]	[illegible]
統營	—	—	—	—	—	—	—	[illegible]	[illegible]	—	—	[illegible]	[illegible]
浦項	—	—	—	—	—	—	—	[illegible]	—	—	—	[illegible]	[illegible]
濟州	—	—	—	—	—	—	—	[illegible]	—	—	—	[illegible]	[illegible]
新義州	[illegible]	[illegible]	—	—	—	—	[illegible]	—	—	—	—	—	[illegible]
龍岩浦	[illegible]	—	—	—	—	—	[illegible]	—	—	—	—	—	[illegible]
鎭南浦	[illegible]	—	—	[illegible]	—	—	[illegible]	[illegible]	—	一,〇〇〇 / 一〇,〇〇〇	—	[illegible]	[illegible]
其他	—	—	—	—	—	[illegible]	[illegible]	—	—	—	[illegible]	[illegible]	[illegible]
計	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

備考　輸入高欄の其他炭は大部分撫順炭にして移入高欄の其他炭は大部分九州炭である。

輸入炭は約一千噸の鴻基炭が南鮮方面に輸入される外大部分撫順炭で、その數約三〇萬噸に達してゐるが、撫順炭の二八%は鐵道局用となつてゐる。外に本溪湖六萬噸、樺太土威炭一・七萬噸は主として製鐵用として輸入されたものである。次に移入炭は殆ど九州炭で筑豐炭（豐國、大瀨、龜山、飯塚、高田、中鶴・方城、鯰田等）が主であるが、外に糟屋、早良、唐津、高島、三池炭等がある。

鮮內消費高

朝鮮内に於て消費される各種石炭は次表のやうに推定せられる。

累年鮮內石炭消費高表（單位噸）

年次＼種別	總需要高	朝鮮炭 數量	朝鮮炭 割合	內地炭 數量	內地炭 割合	滿洲及支那炭 數量	滿洲及支那炭 割合	其他 數量	其他 割合	鮮炭に對する內地炭割合	同上支那炭割合
明治四十三年	一三六、〇五八	五、六六八	四%	七三、九四七	五四%	五七、四三〇	四二%	—	—	三・八二	一・〇九
同　四十四年	二六九、八三〇	三四、四一九	一三	二二三、〇二七	八二	一二、三九四	五	—	—	六・四七	〇・三六
大正元　年	三四八、〇五七	四一、七二七	一二	二〇六、八六八	五九	九九、四六二	二九	—	—	四・八二	二・三六
同　二　年	四〇八、四七九	三五、三六四	九	一四五、八八八	三六	二二七、二二七	五五	—	—	四・一二	六・四二
同　三　年	四一八、八四八	六二、八五七	一五	一二七、二九五	三〇	二二八、六九六	五五	—	—	二・六八	三・四八
同　四　年	四四六、七一三	六四、〇八六	一四	一三四、六四六	三〇	二四七、九七八	五六	五	—	二・一〇	三・八七
同　五　年	四七〇、三九一	六八、一二〇	一四	一二五、三三六	二七	二七六、五七一	五九	四七四	—	一・八四	四・〇六
同　六　年	八八九、八四七	七三、二二七	一一	一三九、八八一	二三	三八七、七五一	五六	一八	—	三・一八	五・三七
同　七　年	八一八、一四八	六七、三〇八	八	二七七、六五四	三四	四七三、二〇一	五八	五	—	四・一三	七・〇三
同　八　年	一、〇一七、二三六	一三一、七〇八	一三	三三八、三〇六	三三	五四七、二二二	五四	—	—	二・四九	四・二四
同　九　年	九九六、四六五	一七三、五七四	一七	二六八、八〇一	二七	五五四、〇九〇	五六	—	—	一・五六	三・二六
同　十　年	八四六、三七八	一八〇、九一三	二一	二二三、四六一	二六	四四二、九四八	五三	五六	—	一・二三	二・四一
同十一年	八六三、二二三	二〇四、三四三	二四	一八一、三七九	二一	四七七、四九六	五五	五	—	〇・八八	二・三四
同十二年	一、〇七七、五五九	二六五、二二九	二四	一九七、六九九	一八	六一三、二三一	五七	一、五〇〇	—	〇・七五	二・三一
同十三年	九四三、九三〇	二五三、五四九	二六	二〇二、三七六	二一	四八五、四三五	五一	二、六八〇	—	〇・八〇	一・九二
同十四年	一、〇八三、四九一	四〇九、六七三	三八	一八七、一八九	一七	四八一、九三九	四五	三、六九〇	—	〇・四五	一・一八
昭和元　年	一、二〇一、六二五	四五九、三三九	三八	二七七、四三八	二三	四五二、九四八	三八	一一、九〇〇	—	〇・六〇	〇・九九
同　二　年	一、四〇五、九四八	四七二、六九七	三四	三一五、八七一	二二	六一四、八〇九	四四	四、五七一	—	〇・六六	一・三〇
同　三　年	一、四三四、四八七	五四〇、六九四	三八	三三二、三七三	二三	五五〇、一〇〇	三九	一、三二一	—	〇・六二	一・〇五
同　四　年	一、五四六、二七〇	六五一、九八五	四二	三四四、二六二	二二	五四九、〇二三	三六	一、〇〇〇	—	〇・五三	〇・八五
同　五　年	一、五七九、七四三	六四四、〇八一	四一	四一五、〇三一	二六	五〇九、六八九	三二	一〇、九四二	—	〇・六四	〇・七九
同　六　年	一、四五〇、八九七	六二〇、六八五	四三	四三七、九五八	三〇	三九一、二五四	二七	一、〇〇〇	—	〇・七〇	〇・六三
同　七　年	一、五五二、六〇六	七〇八、三一九	四六	四五八、四七四	三〇	三六八、七七七	二三	一七、〇三六	—	〇・六四	〇・五〇

註　土城炭輸入高　昭和五年　一〇、九四二　　昭和七年　一七、四〇五

卽右表で明かなるが如く明治四十三年頃朝鮮炭は僅かに鮮內總消費高の四％で他は全部支那及內地炭の輸移入に待つてゐたのであつたものが、今日では約二分の一に近き朝鮮炭を消費するやうになつたのである。かくの如く朝鮮炭が普及したことは第一に鐵道局が朝鮮炭使用に努力したことを舉げねばならない。其他家庭用にも一般に普及したことによるものである

鮮內需要のうち最も大量に消費するは鐵道局であるが、今各炭の購入割合を示せば次表の通りである。

最近五ケ年鐵道局用炭購入數量表（單位瓩）

年次	滿洲及支那炭 撫順炭	滿洲及支那炭 開平炭	滿洲及支那炭 本溪湖炭	朝鮮炭 有煙炭	朝鮮炭 煉炭	滿洲及支那炭 合計數量	滿洲及支那炭 割合	九州炭 合計數量	九州炭 割合	朝鮮炭 合計數量	朝鮮炭 割合	總計
昭和三年	一三〇、三三一	三三、九七六	一、一二五	一三一、四六五	二三、二〇七	一六四、四三二	四五%	三七、六八九	一〇%	一六三、六七二	四五%	三六五、七九三
同　四年	一二一、三六八	二九、九三〇	九三〇	一九六、一九六	一八、三八七	一五二、二二八	三八	三六、〇三八	九	二一四、五八三	五三	四〇四、八五九

同 五年	二〇、〇〇六	一六、一〇六	一八〇	二〇三、七〇四	二六、九九一	一三六、三九三	三三	二九、四三〇	七	三三九、六九五	六〇	三八五、四一七
同 六年	九四、三三五	二、二〇一	一五〇	一九五、二九五	四四、八〇〇	九六、五九六	二六	二六、〇四六	七	二四〇、〇九五	六七	三六三、七五七
同 七年	八四、七六二	—	二、七三六	二〇八、七三八	五四、〇五八	八七、五三〇	二四	一七、二六六	五	二六三、八三九	七二	三六七、五五三

昭和七年鐵道局納入炭中の朝鮮炭を炭種別にすれば次表のやうである。（單位瓩）

炭礦別	安州	鳳山	沙里院	咸興	金剛	通川	古站	龍峴	院坪
數量	四〇、九六一	二七、九六〇	五、三二〇	一三、六三三	六七	四、四一九	三、九九六	五六	六三

炭礦別	極洞	遊仙	雞林	鳳儀	會寧	生氣嶺	龍田	竹浦	青鶴
數量	二、九三四	二、四九三	一八、〇三六	一五、八二〇	二、七八五	三、五三三	一七、九六八	三、七九九	一、三五一

炭礦別	阿吾地	訓戎	慶北	海軍	三菱	電興	江西	其他
數量	二、六八七	九〇〇	八〇七	三一、一五五	一三、五三六	三、五八三	六、四七六	三二九

但 右表にて海軍以下は煉炭である。

私設鐵道の消費高は次の通りである。

朝鮮內私設鐵道石炭消費高（單位瓩）

炭種別＼鐵道名	朝鮮鐵道	京南鐵道	南朝鮮鐵道	价川鐵道	京東鐵道	合計
滿洲及支那炭	六一〇	四、五五八	—	一、〇五〇	九三七	七、一五五
內地炭	六、三五二	三三八	六、〇九五	—	—	一三、六八四
朝鮮炭	八、六九六	六五七	五五五	二一四	一九三	一〇、三一四
合計	一五、六五八	五、四五三	六、六三〇	一、二六四	一、一二九	三〇、一三四

其他の主な消費先は次表の通りである。（單位千〇）

炭種	京城電氣（京城）	朝鮮瓦斯電氣（釜山）	小野田セメント（勝湖里）	同（川內里）	コーンプロダクト（平壤）	朝鮮電氣興業（平壤）	海軍（寺洞）	三菱製鐵（兼二浦）
滿洲及支那炭		一〇	三〇	一〇	—	—	—	八六
內地炭	三〇	一	—	—	—	—	二	一四五
朝鮮炭	—	—	二三	一四	一三	一四	四五	一九

炭種	王子製紙（新義州）	朝鮮窒素肥料（興南）	同永安工場（永安）
滿洲及支那炭	三〇	—	—
內地炭	—	三〇	—
朝鮮炭	—	二一	三七

右の內滿洲及支那炭は三菱製鐵會社を除く外は殆ご撫順炭で內地炭は北樺太土威炭（玆には內地炭に含んでゐる）を除くの外殆ご筑豐炭である。

鮮內の石炭需要の用途別數量は調査頗る困難にて正確な統計を出すことは出來ないが、種々の資料により推知すれば其の割合は略々次の如きものとならう。（單位千瓩）

推定數量	鐵道	船舶	工場	鑛山自家用	煉炭原料	其他
數量	四〇〇	七〇	五六〇	六〇	一一〇	三五〇
百分比	二六	五	三六	四	七	二二

鑛夫數 朝鮮の石炭礦にて稼行してゐる鑛夫の總人員は左表の通りである。(昭和七年末在籍人員數)

昭和七年末鑛夫人員

區別	採炭夫	後山夫	支柱夫	運搬夫	機械夫	選炭夫	其他	合計
有煙炭	二、九九〇	五七三	四二一	七二六	三六三	二七二	一、二二四	六、五六九
無煙炭	九六六	四九八	六四二	四一七	一八三	三六二	一、八三九	四、九〇七
計	三、九五六	一、〇七一	一、〇六三	一、一四三	五四六	六三四	三、〇六三	一一、四七六

備考 「其他夫」の大部分は雜夫であるが、外に工作夫、鑿岩夫、製錬夫、電工夫等を含む。

鑛夫變災數 昭和七年末朝鮮に於ける石炭礦の鑛夫變災數は次の如くである。

區別	變災回數	死亡	重傷	輕傷	合計
坑内	八一二	三九	一六一	一、一四〇	一、三四〇
坑外	一四九	五	一六	一九二	二一三
計	九六一	四四	一七七	一、三三二	一、五五三

昭和八年十一月十日印刷
昭和八年十一月十三日發行

朝鮮の有煙炭

定價金參拾錢 郵税二錢

朝鮮總督府殖産局鑛山課編纂

編輯兼發行者 朝鮮京城府櫻井町一ノ一五 德野眞士

印刷者 朝鮮京城府齋藤町三ノ六二・三 羽田茂一

印刷所 朝鮮京城府齋藤町三ノ六二・三 朝鮮印刷株式會社

發行所 朝鮮京城府南米倉町四番地 社團法人 朝鮮鑛業會
振替貯金口座京城四七〇六番

25X1 32X1 25X1